女子國文大綱

巻二

375.9
Hi-18
資料室

42283
教科書文庫
4
810
42-1930
20000
64437

資料室

昭和五年九月八日
文部省檢定濟
高等女學校國語科用

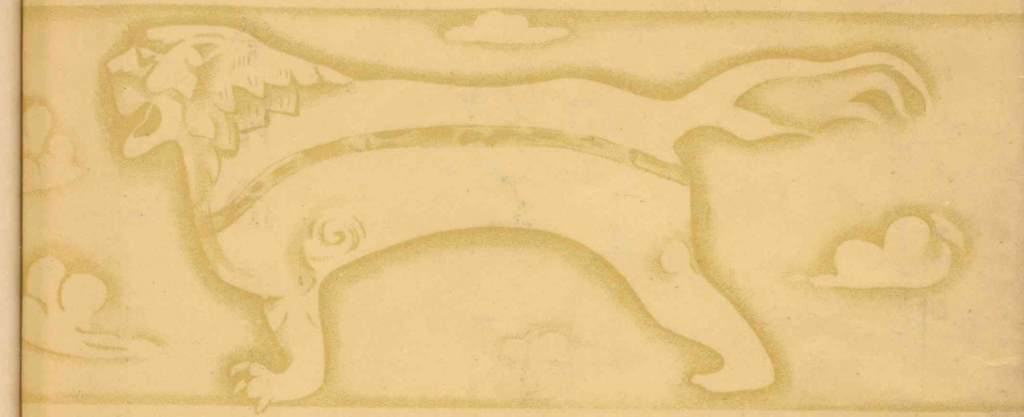
平林治德編

女子國文大綱 卷二

立川書店發行

広島大学
教
64437
図書

37591
Hi18



一A 丸矢久子

國體觀念の涵養、國民精神の作興、國語の正しき理解と使用情操教育等、國語教授の使命は益〻重大を加ふる秋に當りこれに重要なる關係を有する教科書が一夜作りの無責任なものであつてはならない事を痛感したのが本書編纂の動機であります。

材料に就いては權威ある作家の手になつたもので、純正なる國語の表現であり、之を玩味する事によつて、わが國の特質を悟り、われらの祖先、ひいては日本人たるわれ自らの本質を感得するに便なる作品を採り、一方常識を廣め、情操を高め全人間教養に役立つものを選ぶ事に苦心しました。

排列に就いては作品の本質を吟味して、相似たものを連續し、理會の順序を自然ならしめ、且讀後の印象を深からしめ、而もその間に變化あらしめるやう留意しました。

卷九・十に於ては江戸時代以前の作品を倒敍式に排列し、その間に適當の現代文を挿入し、卷末の日本文學年表と相俟つて、文學史の概念を得るに便ならしめました。

採擇の作品に就いては、出來るかぎり原作を尊重しましたが、教授上の用意から多少の改竄をした點は特に原作家の諒恕を仰がねばなりません。頭註に原本の刊行年月・發行所等を記したのは出所を明確に示す一方、自修に便ならしめ、進んで研究を深める興味を起させ度い老婆心からであります。

美術史等の講義の無い中等學校に於て美的情操を養ふのは國語教授の重要な役目と考へますので挿繪には特に意を用ひ、なるべく古今の名畫・彫刻・建築等の寫眞を挿入し、表紙の題簽は藤原行成筆と稱せられる御物倭漢朗詠集から拾字したものであります。

女子國文大綱　卷二

目次

一　皇后陛下の御事ども……（口語）……一
二　日本……（詩）……山村暮鳥　九
三　二百十日……（口語）……夏目漱石　一五
四　立秋の丘より……（口語）……北原白秋　三一
五　蟻……（詩）……西條八十　四〇
六　泣笑ひ……（口語）……國木田獨歩　四二
七　果物の趣味……（文語）……正岡子規　五六

八　柿二つ……（口語）……高濱虚子　六一
九　萩の家……（文語）……落合直文　七〇
一〇　こほろぎ……（詩）……河井醉茗　七五
一一　短歌評釋……（口語）……若山牧水　七九
一二　短歌……………………八三
一三　落葉の音……（手紙）……九條武子　八五
一四　小さな旅人……（口語）……薄田泣菫　八八
一五　うれしさ……（文語）……幸田露伴　九七
一六　停車場で……（口語）……小泉八雲原作　田部隆次譯　一〇三
一七　童謠二篇……（詩）……柳澤健　北原白秋　一〇九
一八　三都氣質……（口語）……鶴見祐輔　一一三

一九　鳩翁道話……（口語）……柴田鳩翁　一二四
二〇　小品二題……（口語）……島崎藤村　長塚節　一三四
二一　牧神と羊の群……（劇）……秋田雨雀　一三八
二二　瀬戸内海……（口語）……志賀直哉　一五六
二三　蜘蛛の絲……（口語）……芥川龍之介　一七〇

皇后陛下

（一 皇后陛下の御事ども）

女子國文大綱　巻二

一　皇后陛下の御事ども

皇后陛下には、久邇宮邦彦王殿下の第一王女にましまし、明治三十六年三月六日東京市麻布區鳥居坂町の宮邸で御生誕になつた。

同四十年三月學習院女學部の幼稚園を終へて、初等科に御入學あそばされ、大正四年三月には六箇年の課程をつゝがなく終へさせられ、初等科を御卒業あそばされた。引續

皇后陛下……御名良子（ながこ）。明治三十六年御生誕。御父は故久邇宮邦彦王殿下。御母は俔子（ちかこ）殿下。大正十三年一月御入輿。

學習院女學部　女子學習院の前身。

初等科　尋常小學校と同程度。

き中等科に御入學、所定の學課を御勉學あそばされてゐたが、第三學年に御在學中、大正七年一月十七日に至り、東宮妃として御入輿の御豫定になつたので、同年二月四日御退學あそばされ、宮家御邸内に新に御學問所を設けられ、爾來高等普通諸學科に就いて、それぞれ擔任教官によつて御修學を續けられたのであつた。

御通學時代の御寫眞

御研究には極めて御熱心で、御通學中は所定の學課を孜孜として御勉強になつたが、御退學後も定められた時刻に

御學問所にお出ましになつて、御課程にいそしまれ、殊に御心づきの點に就いては、周到な御注意を以て、一々ノートに御書留めになり、なほ御會得の十分でない箇所があれば、最後の點まで御質問あつて、御修學は徹底的であらせられた。

陛下には御體格がお勝れになり、御發育も極めて良好に拜せられ、初等科御入學の當時すでに衆にぬきんでた御氣品を備へさせられたといふことである。

御入輿以來終日御多忙な當時攝政宮殿下に渡らせられた今上陛下をよくお扶け遊ばされ、御内助の功も多いことであるが、なほ益、御修養御研究を重ねさせられる思召から、日曜日の午前中は今上陛下と御同席で、臨時御進講を御聽

ソプラノ Soprano 樂音の最高音部。

御成婚の際の御寫眞

御妹宮 信子女王。明治卅七年御生誕。

御學友 中村貞子。男爵佐藤達次郎の女。明治三十六年生。平山信子。故樞密顧問官平山成信の女。明治三十六年生。

講あらせられた。

陛下には又天性豊かな藝術的御趣味に富ませられ、お聲は澄渡つた良いソプラノであらせられる。宮家御在邸の頃も、近侍の人達は陛下の御獨唱を漏聞いて、今更のやうにそのお聲に引きつけられるのであつた。折々御妹宮と二人の御學友とで、複雜な合唱をあそばす場合には、陛下はいつも一番高い音を御受持遊ばされた。

小野鵞堂 名は鐧之助、書家。女子學習院教授。大正十一年歿、年六十一。

繪畫は學習院御在學中に、木炭畫と油繪とをお學びになつたが、大和繪にも堪能であらせられた。元來御手先が優れて器用でいらせられるから、大和繪の纖細な線で、人物や風景をお寫しになるのには至極よい。書は小野鵞堂氏が御在學中から御退學後も引續き拜見してゐた。陛下は書にも大層御趣味を持たせられ、お習字をあそばされぬ日とては殆どない。御書風なども、古名家の筆蹟をお集めになり、あかず御研究あそばされた。

かく陛下は御勉強に御多忙であらせられる一方、御健康にも非常に御注意を拂はれ、殊にテニスでは、輕快な御動作をお示しになつた。　また薙刀はずつと以前から御稽古あ

御入輿後の陛下

そばされてゐたが、あの優しい陛下が、手輕な筒袖で、長柄をひたとお構へになりきつと御相手に向はせられ、澄徹る御懸聲で「や」とお打込みになるお姿は、なんとも勇しく拜された。かうした運動家でいらせ

られるから、休暇の時など箱根あたりに成らせられると、お附の人達が、「これは。」と御心配申上げるやうな坂路でも、眞先にずんずんお歩きになつたといふ事である。　お丈は五尺一寸五六分で、まことに完全な御體格であらせられる。

いかばかり身はひくゝとも眞心を
たもたん人ぞ尊かるべき

これは陛下のお歌である。　また御通學時代の御作文の一節に「人の同情心には、その境遇によつて深い淺いの相違があるといふことであるが、自分はかうした境遇にゐるため、世人に對する同情が淺くはないであらうか。　自分は窃にそれをおそれる。」といふ意味を明快な御筆致で御熱心

に、お心の底からお感じになつたまゝをお述べになつたのがある。また「身をつみて人の痛さを知る。」と題して熱と力との籠つた文章で、その優しいお胸に溢れる慈愛のお感じをお漏しあそばされたのがある。まことに陛下の生れながらにお備へになつていらつしやる御徳は、誠に尊いものであると拝察する次第である。

「なんと完成された美しい御女性でいらせられるのだらう。」陛下の數多い近侍の人々は、皆一致してかう申上げてゐる。

左に御歌二三首を謹載しよう。

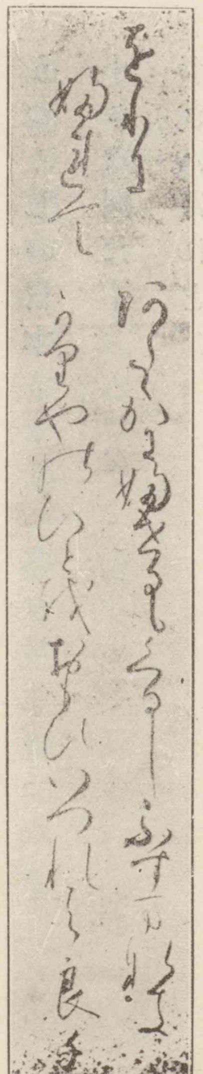
若菜

皇后陛下御筆蹟
をりにふれて
あたゝかにふせるもくるしふすまなきかりやのひとをおもひいづれば　良子

馬上孝太郎　東京文理科大學幹事。前女子學習院教授。

山村暮鳥　名は土田八九十。群馬縣堤ケ岡の人。立教大學神學部卒業。大正十三年歿、年四十一。

枯草のひまにおひたる初若菜
つみてさゝげん神の御前に



勅題山色連天

初日の出をろがみをへてかへりみる
そらにつゞけりふじの高嶺は　（馬上孝太郎の文による）

二　日本

山村暮鳥

日本うつくしい國だ

葦の葉つばの朝露がぽたりと
おちてこぼれてひとしづく
それがこの國となつたのだとでも言ひたいやうな
日本
大海のうへに浮いてゐる
かはいらしい日本
うつくしい日本
小さな國だ
小さいけれど
その強さは鋼鐵のやうな精神である
おゝ日本

ぴちぴちしてゐる魚のやうな國
勇敢な日本
古い日本
その霧深い中にとぢこもつて
山鳥の尾のながながしい夢を見てゐたのも
今はもうむかしのことだ
目をあけて
そこにどんな世界をお前は見たか
日本 日本
お前のことをおもふと
この胸が一ぱいになる

お前は希望にかゞやいてゐる
お前は力にみちみちてゐる
そして眞劍だ
だが日本よ
お前の道はこれまでのやうに
もうあんな平坦なものではあるまい
お前はよるひる絶えず
お前のまはりに打寄せてゐる
その波の音をなんときいてゐるか
寂しくないか
おゝ孤獨な

遠い一つの星のやうな日本
からりとはれた黎明の天空(そら)のやうな國
ときどきは通雲(とほりぐも)の
さつとかゝるくらゐのことはあつても
おまへはただの一度でも
その顏面(かほ)に泥をぬられたことがないんだ
そんな美しい國なんだ
日本
幸福な日本
強い日本
わたしらはこゝで生れたんだ

またこゝで最後の息をひきとつて
遠祖らと一緒になるんだ
墳墓の地だ
靜かな國日本
小さな國日本
つよくあれ
すこやかであれ
奢るな
日本よ眞實であれ
ばかにされるな

夏目漱石　名は金之助、東京牛込區喜久井町に生る。文學者、小説家。大正五年歿、年五十。

三　二百十日

夏目漱石

「あの音は壯烈だな。」
「足の下が、もう搖れて居る樣だ。おい一寸地面へ耳をつけて聽いて見給へ。」
「どんなだい。」
「非常な音だ。」
「その割に烟が來ないな。」
「慥に足の下が唸つてる。」
「風の所爲だ。北風だから、右へ吹きつけるんだ。」
「樹が多いから方角が分らない。もう少し登つたら見當がつくだらう。」

夏目漱石

暫くは雜木林の間を行く。道幅は三尺に足らぬ。いくら仲が善くても、並んで歩く譯には行かぬ。圭さんは大きな足を悠々と振つて先へ行く。碌さんは小さな體をすぼめて小股に後から跟いて行く。跟いて行きながら、圭さんの足跡の大きいのに感心して居る。感心しながら歩いて行くと、段々後れて仕舞ふ。

路は左右に曲折して爪先上りだから、三十分と立たぬうちに、圭さんの影を見失つた。樹と樹との間をすかして見ても、何も見えぬ。山を下りる人は一人もない。上るものにも全く出會はない。只所々に馬の足跡がある。たまに草鞋の切が茨にかゝつてゐる。その外に、人の氣色は更にない。

餛飩腹の碌さんは少々心細くなつた。

昨日の澄切つた空に引換へて、今朝宿を立つ時からの霧模樣には少し懸念もあつたが、晴れさへすればと、好い加減な事を賴みにして、とう〳〵阿蘇の社までは漕附けた。白木の宮に禰宜の鳴らす柏手が、森閑と立つ杉の梢に響いた時、見上げる空から、ぼつりと何やら額に落ちた。今朝がた餛飩を煮る湯氣が障子の破れから吹いて、白く右へ靡いた頃から、午過は雨かなと思はれた。

阿蘇の社 阿蘇神社、官幣大社、熊本縣阿蘇郡宮地村に在り。健磐龍命・阿蘇比咩・速瓶玉命等を祀る。

雜木林を小半里程來たら、怪しい空がとう／＼持切れなくなつたと見えて、梢に滴る雨の音が、さあと北の方へ走る。後から、すぐ新しい音が耳を掠めて翻る木の葉と共に又北の方へ走る。碌さんは首を縮めて「ちえつ。」と舌打をした。

一時間程で林は盡きる。盡きると云ふよりは、一度に消えると云ふ方が適當であらう。振返る後は知らず、貫いて來た一筋道の外は、東も西も茫々たる青草が波を打つて、幾段となく連なる奥から

阿蘇神社

むく／＼と黑い烟が持上つて來る。噴火口こそ見えないが、烟の出るのはつい鼻の先である。

林が盡きて、青い原を半町と行かぬ所に、大入道の圭さんが空を仰いで立つてゐる。蝙蝠傘は疊んだ儘、帽子さへ被らずに、毬栗頭をぬつくと草から上へ突出して、地形を見廻してゐる樣子だ。

「おうい。少し待つて吳れ。」

漱石山房

永日小品

猫の墓

早稲田へ移つてから、猫が段々瘦せて來た。一向に小供と遊ぶ氣色がない。日が當ると縁側に寐てゐる。前足を揃へた上に四角な顎を載せて、じつと庭の植込を眺めたまゝ、いつ迄も動く樣子が見えない。小供がいくら其傍で騒いでも知らぬ顔をしてゐる。小供の方でも初めから相手にしなくなつた。

漱石筆蹟

三 二百十日

「おうい。暴れて來たぞ。暴れて來たぞう。しつかりしろう。」

「しつかりするから、少し待つてくれえ。」と、碌さんは一生懸命に草の中を這上る。漸く追ひつく碌さんを待受けて、

「おい、何を愚圖々々してゐるんだ。」と圭さんが遣つつける。

「だから饂飩ぢや駄目だと云つたんだ。あゝ苦しい。おい君の顏はどうしたんだ。眞黑だ。」

「さうか。君のも眞黑だ。」

圭さんは無造作に白地の浴衣の片袖で頭から顏を撫廻す。碌さんは腰からハンケチを出す。

よな　火山灰。熊本地方の方言。

「なる程、拭くと着物がどす黑くなる。」

「僕のハンケチもこんなだ。」

「ひどいものだな。」と圭さんは雨の中に坊主頭を曝しながら、空模様を見廻す。

「よなだ。よなが雨に溶けて降つてくるんだ。そら、その薄の上を見給へ。」と碌さんが指をさす。長い薄の葉は一面に灰を浴びて、濡れながら靡く。

「成程。」

「困つたな、こりや。」

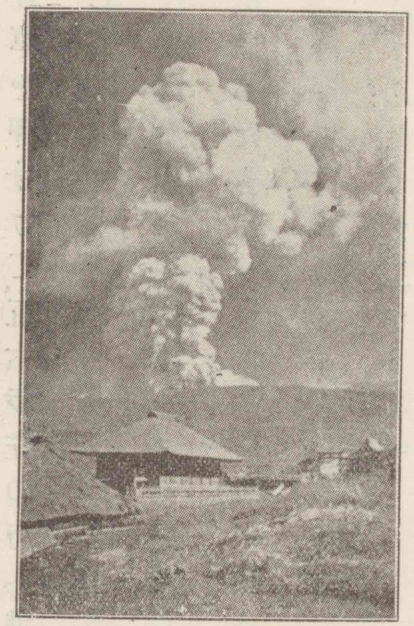
「なあに大丈夫だ。ついそこだもの。あの烟の出る所を目當にして行けば、譯は無い。」

「譯は無さゝうだが、是ぢや路が分らないぜ。」
「だから、さつきから待つて居たのさ。こゝを左へ行くか、右へ行くかと云ふ、丁度股の所なんだ。」
「成程、兩方とも路になつてるね。併し畑の見當から云ふと、左へ曲る方が好さゝうだ。」
「君はさう思ふか。僕は右へ行く積だ。」
「どうして。」
「どうしてつて右の方には馬の足跡があるが、左の方には

阿蘇噴火口

少しもない。」
「さうかい。」と、碌さんは、身體を前に曲げながら、蔽ひかゝる草を押分けて、五六歩左の方へ進んだが、すぐに取つて返して、
「駄目な樣だ、足跡は一つも見當らない。」と云つた。
「無いだらう。」
「そつちにはあるかい。」
「うん、たつた二つある。」
「二つきりかい。」
「さうさ、たつた二つだ。そら其處と此處に。」と圭さんは繻子張の蝙蝠傘の先で、かぶさる薄の下に、幽かに殘る馬

の足跡を見せる。
「是だけかい。心細いな。」
「なに大丈夫だ。」



阿蘇噴火の景

「天佑ぢやないか、君の天佑はあてにならない事夥しいよ。」
「なに、是が天佑さ。」と圭さんが云了らぬうちに、雨を捲いて颯とおろす一陣の風が、碌さんの麥藁帽を遠慮なく吹込めて、五六間先まで飛ばして行く。眼に餘る青草は、風を受けて一度に

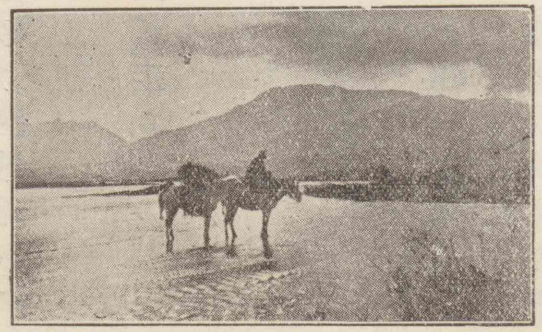
向ふへ靡いて、見るうちに色が變ると思ふと又靡き返して故の態に戻る。
「痛快だ。風の飛んで行く足跡が草の上に見える。あれを見給へ。」と、圭さんが幾重となく起伏する青い草の海を指す。
「痛快でもないぜ。帽子が飛んぢまつた。」
「帽子が飛んだ。いゝぢやないか、帽子が飛んだつて取つて來るさ。取つて來てやらうか。」
圭さんは、いきなり自分の帽子の上に蝙蝠傘を重しに置いて颯と薄の中へ飛込んだ。
「おい、この見當か。」

三 二百十日

「もう少し左だ。」
圭さんの身體は次第に青い物の中に、深くはまつて行く。仕舞には首だけになつた。あとに殘つた碌さんは又心配になる。
「おうい、大丈夫か。」
「何だあ。」と向ふの首から聲が出る。
「大丈夫かよう。」
やがて圭さんの首が見えなくなつた。
「おうい。」
鼻の先から出る黑烟は、鼠色の圓柱の各部が絶間なく蠕動を起しつゝある如く、むく／＼と捲上つて、半空から大氣

の裡に溶込んで、碌さんの頭の上へ容赦なく雨と共に落ちてくる。碌さんは悄然として首の消えた方角を見詰めて居る。
暫くすると、丸で見當の違つた半町程先に、圭さんの首が忽然と現れた。
「帽子はないぞう。」
圭さんは坊主頭を振立てながら、薄の中を泳いで來る。
「帽子は入らないよう。早く歸つてこうい。」
「おい、何處へ飛ばしたんだい。」
「何處だか、相談が纒らないうちに飛ばしちまつたんだ。帽子はいゝが、歩くのは厭になつたよ。」

「もういやになつたのか。まだ歩かないぢやないか。」
「あの烟と、この雨を見ると、何だか物凄くつて、歩く元氣がなくなるね。」
「今から駄々を捏ねちやしかたがない。——壯快ぢやないか。あのむく〳〵烟の出てくる所は。」
「あのむく〳〵が氣味が悪いんだ。」
「冗談云つちやいけない。あの烟の側へ行くんだよ。さうしてあの中を覗き込むんだよ。」
「考へると全く餘計な事だね。」



阿蘇山遠望

「兎も角も歩かう。」
「はゝゝ、ともかくもか。君がともかくもと言出すと、つい釣込まれるよ。さつきもともかくもで、とう〳〵饂飩を食つちまつた。」
暫くして圭さんは立止つて、黑い烟の方を見る。
濛々と天地を鎖す秋雨を突拔いて、百里の底から沸騰る濃いものが渦を捲き、渦を捲いて、幾百噸の量とも知れず立揚る。その幾百噸の烟の一分子が、悉く震動して爆發するかと思はれる程の音が、遠い〳〵奥の方から濃いものと共に頭の上へ躍り上つて來る。
雨と風のなかに、毛蟲のやうな眉を攢めて餘念もなく眺

漱石全集 第二卷「二百十日」六三七頁—六四九頁。大正九年十二月、漱石全集刊行會發行。

めて居た圭さんが、非常な落著いた調子で、

「雄大だらう、君。」と云つた。

「全く雄大だ。」と碌さんも眞面目で答へた。

「恐しい位だ。」暫く時をきつて碌さんが附加へた言葉はこれである。

圭さんはのつそりと踵を廻らした。碌さんは默然として跟いて行く。空にあるものは烟と雨と風と雲である。地にあるものは、青い薄と女郎花と處々にわびしく交る桔梗のみである。

二人は煢々として無人の境を行く。

（漱石全集）

阿蘇山

（三 二百十日）

北原白秋　名は隆吉。明治十八年福岡縣柳河町に生る。詩人。

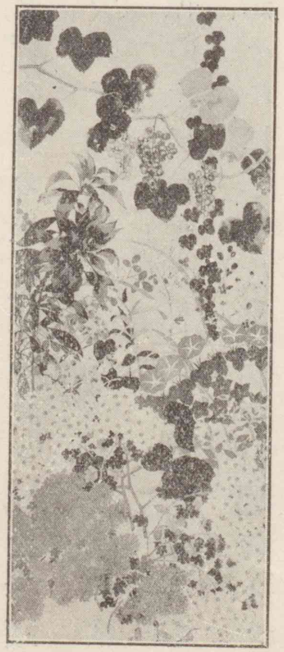
四　立秋の丘より

北原白秋

私の家のはいり道は、孟宗藪の際を曲つてゐる。その藪の際の冷えびえとした茗荷の葉の上に、褪めかゝつた赤頭の小蠅が、ぽつりぽつりと縋りついてゐるのを見た。もう十日ばかり前の事である。小徑の上には、まだ暑い西日がぢりぢりと照りつけてはゐたが、それにしては影の薄い蠅のとまり方であつた。もう秋だなと私は歩を移した。

その孟宗藪にほのかな白い茗荷の花が咲出したのも、ついこのごろであつた。茗荷の間や竹の根には、もう水引の紅い點々が見えて來た。その竹林にはこぼれ陽がさして、

秋の草花の圖



聖嶽　箱根外輪山の一峯。

子どもがよく裸で遊んでゐるのを見かけたが、それすら一日一日と稀になつて來るのであつた。藪の出はづれに、いつでも明るくそよいでゐた小竹の姿も、もう大して輝かなくなつた。

　酷暑の間はひどく腸胃をいためたので、たいがい私は階上の書齋で寝たり起きたりしてゐた。寝椅子から、私はよく海や山の方を眺めながら朝夕を送つた。浪の音も久しぶりでしみじみと聽いたが、向ふの聖ケ嶽の雲や雨霧のたゝずまひなどに眺め入ることも私

の心を閑かにした。風は日中でも、机の上の原稿用紙を、はらはらと吹飛ばすくらゐには吹通した。私の病氣はぶりかへしぶりかへししながら、どうにか輕快に近づいたが、その間に、油ぎつててら／＼してゐた庭の向日葵の花も、ことごとく焦げつくしてしまつた。がつくりと垂れた蕚や、その頸を、眞上から見るのは淋しいものだ。下へ降りて、その黒い蕊の座圓を仰ぐことはまたあまりにわびしい。箱根連山の前景には、寺の墓地の椢と栗とが見える。椢はもう淺緑の土用芽が出揃つたし、葉と一しよに風に揉まれ／＼する栗の青いがも、いつの間にか眼につくやうになると、法師蟬の啼きたてる聲ばかりが涼しくなつた。つく／＼ぼ

北原白秋

ふし、おゝしいつくしい……。

階上に倦むと、私は病床を時をり竹林の離れ家に移した。

地面に近く寝たり坐つたりして、木の姿や竹の幹をつくづくと下から眺め上げるのは親しい感じのものだ。　つゝましい心になつて、拜むやうに苧(からむし)の日射などを見入つてゐたこともあつた。

その竹林で行水などをする夕涼の頃もよかつた。　竹の

枝には馬追が舌を打つし、孟宗の枝垂れた葉裏には、月の光の下で、巣別れをしたての蜂の子が小さな緑色の巣を營んでゐるし、まだそこらが蒸暑い夕凪の空などには、茅屋根の蔦の花の上を、とうすみ蜻蛉の小飛行隊が右往左往に飛びすますと、それを追ひかける燕の白い腹までが、ひらり〳〵と赤く光つて、消えるとまた引返して來る。　あの忙しがりやの幾羽かを、私はよく縁側から仰いだ。

今では私もまた以前のやうに、庭上の朝飯をとるやうになつた。　家の前の孟宗と梅の木の下に白木の小卓を据ゑて、それに曲木の椅子を三脚ほど添へただけの簡素なものである。　妻子と向きあつてふかしたてのパンでもむしつ

てゐるうちには、身輕な若者が朝の牛乳を配達して來る。椅子の後には茗荷の香もすれば、豆蓼の花もそよいでゐる。涼しいやうでも、朝日影のうちから、まだ炒りたてるじいじい蟬の聲がする。かと思ふとつく／＼ぼふしも、蜩も啼く。蜩の聲はまだしら／＼明けから、あの細い／＼金屬性の線の音を彈じかせるのである。夕食は、緋と黄色のカンナの咲明つてゐる戸口で、木馬の脊に蠟燭を立てて、ぼうつと火がぼかす圏内の卓上に用意される。そこらの若篠の葉には、まろ／＼と露が太つて搖れる。枇杷の木の枝の高くに、天の川も濃くなれば、二つ星や三つ星の瞬も生れて來る。カンナはもう茅の庇まで屆いてゐるのである。

秋の野邊の圖

この頃の夜は月がや〻缺けはじめたが、宵のうちから赤い大きな火星が、もう東寄りの海の上に出てゐる。その大きい光芒は、ついこの丘の下の電燈ほどに見える。私はよく屋根裏にのぼると、まづ火星から南天の星座へと双眼鏡をうつして行く。まだまだ浪の音が凄じい。土用波の名殘ででもあらう。その潮鳴の上を幽かに／＼渡つて來る小鳥の群も、これからは多くなることであらう。

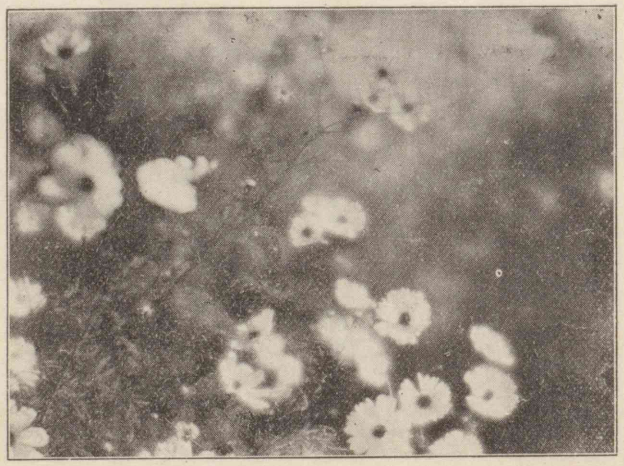
かうした初夜から後夜にかけて、啼く蟲の音もいゝ。色色の蟲の聲が、時間の移るにつれて異つた音色と代つて行く。よく聽いてゐるとこの秋ほど蟲の音の深いことはない。地震の跡で何處も此處も何一つ手入しないので隣の別莊では、畠も、砂道も、丘の廣場も、まるで鐵道草の曠野になつてしまつた。鐵道草の花も見えるかぎりが咲きさかると、花の煙のやうで、ほのぼのとあはれなものだ。晝間はその絮毛(わたげ)が空一面に滿ちて、まるで火山灰のやうな濃密さで飛んで來る。

今朝は思ひきり早く起きた。やゝ颱風めいた雨の中を子どもと、庭一ぱいに茂りつめたまだ葉ばかりのコスモス

季節の窗　「立秋の丘より」二六九頁―二七三頁。大正十四年五月、アルス發行。

の中を掻分け掻分けゆくと、垣根のかなめにからんで、白い朝顔の花が一つ二つ咲いてゐたのが目についた。柴折戸を拔けると鐵道草が背の丈よりも高く亂れてゐる。一二々々ともぐつて行くと隣の別莊の井戸に出る。そこで私たちは交互にポンプの水にかゝつた。絮毛が飛ぶ。身體がかゆくなる。又水を浴びる。

かうして私は今、孟宗と、花と、蟲の音と、蟬の聲と、この鐵道草の絮毛とにすつかり埋つてしまつてゐるのだ。（季節の窗）



コスモス

西條八十　明治二十五年東京市牛込區拂方町に生る。早稻田大學英文科卒業後東京帝國大學選科に學びしことあり。大正十三年佛國留學。現在早稻田大學講師。詩人。

道灌山　東京市外日暮里にあり。太田道灌の城址。

五　蟻

西條八十

蟻　蟻
寂しかろ。
はこべの葉つばに
ついて來た
道灌山の
黑蟻を
神田の通りで
放したが。

西條八十詩集　三一二頁―三一三頁。昭和二年十二月，第一書房發行。

國木田獨步　名は哲夫，下總銚子の人。小說家。明治四十一年歿，年三十八。

蟻　蟻
寂しかろ
路がわからず
さびしかろ。

（西條八十詩集）

六　泣笑ひ

國木田獨步

時之助の母は女中お光の歸るのを一刻千秋の思で待つて居る。

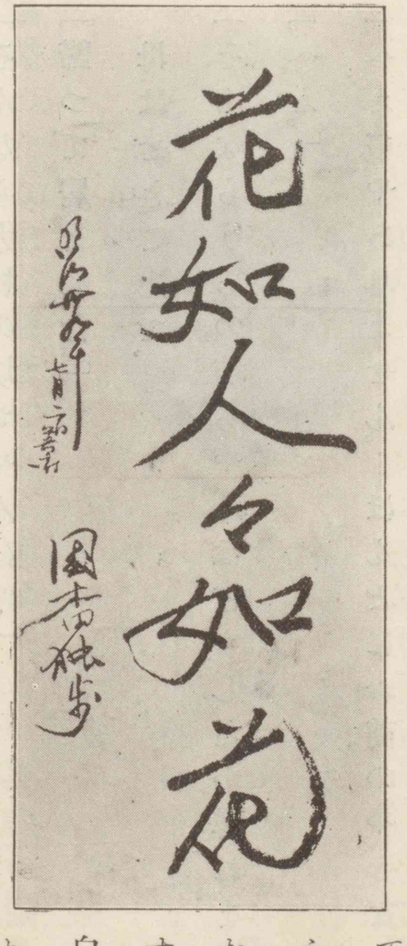
「またあの魯鈍のことだから、のろくさ〳〵して居るのだらう。ほんとに仕樣がないねえ。」とおほじれにじれて居

國木田獨步

る。
　すると お光は果して頗る暢氣に、鼻歌でも唄はんばかりの様子で歸つて來た。と母親には見受られたのである。
　いきなり、
「お光！　お光！　お前何をぐづぐづして居るのだえ。ほんとに。」
「へえ。」と年は十七ばかりの、孤兒だから可哀さうだと、東京から連歸つた女中が、眼をばちくりばちくり、奥樣の顔を眺めて居る。
「へえもないもんだ、それで片山の武さんは歸つて居ましたか。」
「へえ、片山の坊ちやんは歸つて居ました。」
「そんなら大村の坊ちやんは？」
「歸つて居ました。」
　母はせきこんで、
「そんならうちの坊ちやんはどうしたか尋ねましたか。」
「へえ。」
「へえぢやありません。ほんとにお前のやうな大馬鹿がありますか。うちの坊ちやんの事を聞かないくらゐならお使に行つて何の役にたちます。」
「でも奥樣がただ片山の坊ちやんと大村の坊ちやんが歸

つたか聞いて來いとおつしやいましたから、それで……。」
「さう言ひましたとも、けれどなぜうちの坊ちやんはと一言きくことが出來ません。」と、にらみつけてすぐ奥に向いて「ほんたうにあなた心配ですから、御自分でちよつと聞

獨歩筆蹟



いて來て下さいませんか。」
夕闇薄暗き縁側に涼んで居た休職判事の父親はまた悠

然たるものである。團扇をばたりばたり、
「まあお前のやうにわい／＼騷いだつて仕様がないよ。きつと寄道でもしたのだから、今に歸つて來るよ。」
「あなたもそんな暢氣な事ばかりおつしやつて、もしかの事があつたらどうなさいます。」
「もしかの事とはどんな事だ。」
「もしかの事とはもしかの事です。」
「うちの時が水へでもはまつたと言ふのだらう。」
「さうですとも。そんな事が無いとも限りません。いつれが子供のことですから驚いて逃げて來て知らん顏をして居るなんて、よく東京でもあるぢやありませんか。」

「そんな馬鹿々々しいことがあつてたまるものかね。第一お前は時等が釣に行く場所の模様を知らないから、さういふことを言ふのだ。今日、時が釣に往つた處は平地で池の堤といふものがない、だから落ちやうがない。よしんば落ちたにしても足をのめりこますくらゐのもので、決して生命にかれこれある筈がないのだ。きつと、寄道をして居るのだよ。」といはれておつなことをおつしやると言ひたさうな身構へをして東京の奥様、
「堤があるか無いか、去年來たばかりの私にはお國の事は存じませんが、もしあなたが、たつて寄道をしたのだとおぼしめすなら、ちよつと聞いて來ていただくわけに参りませ

んか知ら。片山の坊ちやんでも、うちの時が寄道をしたのか池にはまつたのか位は知つて居なさる筈ですから。」と東京式のせきこんだ調子で迫る。一方は平氣なもの、

「お前が心配するのだから、お前が聞きにゆけばいゝぢやないか。」
「行きますとも、そんなら私が行きます。」
「あれ奥様、私が參ります。」

「いゝえ、私が行きます。お前などに頼むと安心が出來ません。」

「いゝえ、私が參ります。」

「うるさいね、兩人で行つたらいゝだらう。」と父の一聲。

母とお光は申しあはせたやうに默つて了つた。そしてこそ〳〵兩人は外方に出掛けた。

「お光や。お前は片山へ行つて聞いておいで。私は此處で待つて居るから。時はいつもこの道から歸るから。」と言はれてうちから四町ばかりの淋しい辻に奥様を殘してお光は再び片山のうちへと急いだ。

夕月靄をこめて蓮池の香り高き處に母は月に向つて立

つて居た。しばらくするとお光が歸つて來て、

「奥様やつばり坊ちやんは居殘りなんださうです。」

「一人でかえ。」

「へえ。」

「まあ何といふ子だらう。田舍道の一里上もある所へ遊びにゆきながら、日が暮れても歸つて來ないなんて……。」

「今にお歸りになりますよ。」とお光は奥様の泣出しさうな聲を聞いて慰める。奥様は無言で蓮池と屋敷との間を通ふ眞直な道を眺めて居たが、

「お前先へお歸り。そして風呂の下を見てお置き。私は少し此處で待つて居るから。」

魚釣り　成瀬芳之筆

「畏まりました。」とお光の去つた後で、母は「若しか」といふ場合を色々に想像して、胸の痛くなる程心配して待つて居ると、間もなく蓮池の縁に小さな影が見えだした。だんだん近づいて來るのを見ると、時之助らしい。けれども若しか又ほかの子かも知れぬと心も空に見つめて居ると釣竿を肩にして左手に魚籠を提げ、小聲で唱歌を歌ひながら來るのは正しく時之助である。

「時ぢやありませんか。」といふ一刹那、悲しみ變じて喜となる。

「やあ、おつかさん其處で何をして居るのです。」

「まあこの兒は。何をして居る所ぢやありません。お前

こそこんなに遲くまで何をして居たのです。」といふ時、喜變じて怒となる。

「釣つて來ました。今日は澤山釣れましたよ。」

「もうこれから決して釣にはやりません。」

「なぜ?」

「なぜもないもんです。さつさとお歸りなさい。」

と母親は安心して先へ立ち歩めば時之助は平氣なもの、口笛を吹きながら續く。

流石にいくらか心配になつてゐたと見えて父は玄關先に立つて居たが、二人の姿の門内に現るゝや、

「歸つた、歸つた!」とにこ〳〵する。

魚釣り

本圖は昭和二年帝展八回出品畫にして「緑蔭釣魚」と題せらる。

「まあ、あなたどうでせう居殘つて釣つて居たのですとさ、呆れた子ぢやありませんか。」

「時、お前があまり遲いのでおつかさん大變心配しましたぞ。」と父から言はれても、それには答へず、

「今日は澤山釣れましたよ、今見せます。」と言捨てて裏へ廻り井戸端で足を洗つて、魚籠を提げたまゝ座敷へ入り洋燈の下で魚籠の蓋を取り、

「そらこんなに釣れました。」

「どれどれ。」と父は覘き込んで、

「成程これはお前にしては大漁だ。」と感心する。

「隨分大きなの居ますよ。見せませう。」と臺所へ飛んで

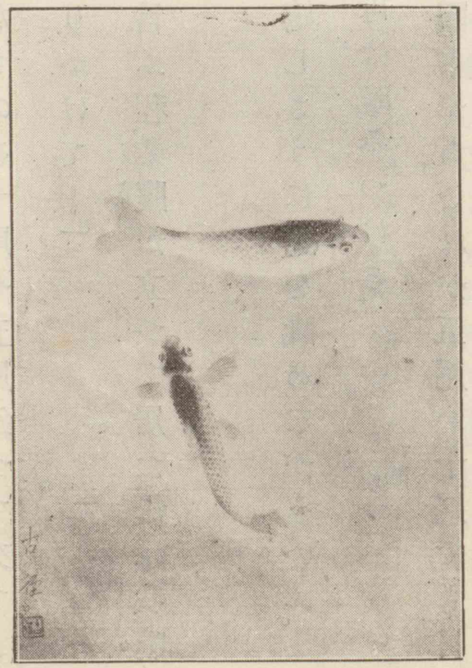
行き、

「光、擂鉢をお呉れ。」

お光は擂鉢を渡しながら、

「大變遲うございましたことねえ。」

「だまれ！」と擂鉢をふんだくり、座敷に飛んで歸つて、魚籠をあけると、大小四五十尾の鮒が銀光を放つて、ぞろぞろと出て來る。



鮒の圖

「ねえ、とうさん、これなぞ隨分大きいでせう。」

「なる程これは大きい。」

「何になります。そんなものを十尾や五尾釣つて來て。ほんとに人に心配ばかりかけて！」

と先程から父が優しく言ふ程、業腹が立つて居た母は我鳴りつける。

「ほうだ。」と時之助は嬉しさうに鮒を眺めながらいふ。

「何が『ほう』です。」と母は睨みつける。

「だつておつかさんの國ぢやあこれが五尾か十尾でも、日本帝國では四十九尾ですからね。」

「百尾でも五尾でもそんなものは同じことです、生意氣を

言ふ。」

「でもこいつのやうな大きい鮒はおつかさん見たことが無いでせう。」と鮒の尾を摑んでぶらさげて見せる。

「何が大きいものか。鼻へねぢり込みさうな物が何になります。」

「ほうだ。」

「何が『ほう』です。」

「ほうだ。」

「何が『ほう』です。」

「だつておつかさんの鼻の穴は隨分大きい穴ですねえ。」

「なぜです。」

獨歩全集 「泣き笑ひ」七三三頁—七四一頁。大正九年十二月、博文館發行。

「だつてこの鮒が鼻へねぢり込まれるのですもの。」と平氣でいふのを聞いて父は思はずくす〳〵と笑つた。「まあこの子は、この子は。」と母は口惜しいので泣くのか、可笑しいので笑ふのか、眼には涙、口元は笑み、呆れ返つて後の言葉が出ない。（獨歩全集）

正岡子規 名は常規、愛媛縣松山の人。俳句及び和歌の革新者。明治三十五年歿、年三十六。

七 果物の趣味

正岡子規

果物ほど味の高く清きものはあらじ。小兒はこれを好み、仙人もこれを喰ふとかや。

青梅は酸強く口を絞れども、鹽少しばかりつけんには、味言ひがたし。うら若き女の人には隱れて眉あつめたるも

子規自畫像

らうたげなり。杏はからびて賤しく、李は水多くしてあさはかなり。苺は西洋苺を良しとす。されど行脚の足草臥れて草鞋の緒緩みたる頃、巖の角に腰打据ゑて汗を拭ふ手の下に、はしなく見つけて取食ひたる味は問はず、時に取りていと嬉し。

枇杷はうまけれども、種子大きく肉少きこそ飽かぬ心地はすれ。桑の實はなべての人に知られねども、果實の中、こ

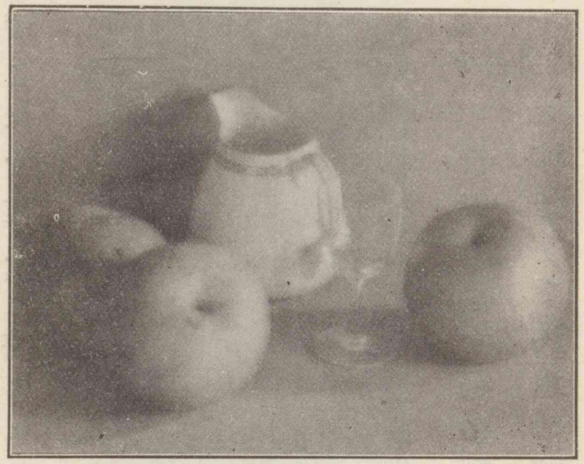
王母　西王母。支那の仙女。漢の武帝に三千年に一度みのる桃の實を獻じたりと傳ふ。

果物

れを外にして甘きものはなし。晝餉さへしたゝめずに貪りたる木曾の旅の思ひ出でられて懷し。

夏橙・ザボンのたぐひ、俗を離れて涼し。さして良しとにはあらねど、少し病みて飯えたうべぬ折など、またなきものとぞ覺ゆる。

梨は涼しく潔し。南窓に風を入れて、柱に倚り、襟を披き、片手にて團扇を持ちながら一片を口にしたる、氷にも優りてすがすがしうこそ。林檎は北海道の產を最上とす。齒にさはれば形消えて涼やかなる風味ばかり口にのこりたる、仙人の藥にも似たらんか。桃には種類多し、善きもあり、惡しきもあり。王母後園の風味は知らねど、總べて世に諂はぬところに一段高き處あり。



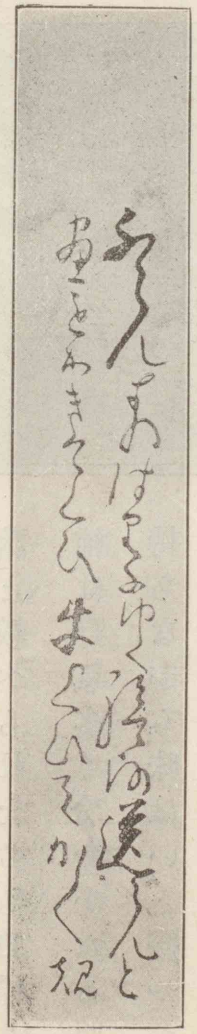
葡萄は甘からず、澁からず、人に媚びず、さりとて世に負かず君子の風あり。栗は賤し。甘藷と較べられたるも口惜し。柿は野氣多く、冷やかなる腸を持ちながら、味はいと艷やかなり。多血性の人、世を厭ひて野に隱れながら、なほ物に觸れて熱血を迸らすにも譬へんか。冷腸熱血我最もこの物を愛す。柚子は氣高けれど食ふべからず。石榴・無花果のわれ

子規筆蹟
ふらんすのばりにゆく繪師送らんと畫をかきてくひ牛くひてかく

子規全集
第七巻「松蘿玉液」一九八頁—一〇〇頁。大正十三年十月、アルス發行。

から裂けたるは喰ひ劣りぞする。

われこの夏頃よりわけて果物を貪り、物書かんとすれば必ずこれを食ふ。書きさして倦めばまたこれを食ふ。食へばすなはち心涼しく、氣勇む。氣勇めばすなはち想涌き、筆飛ぶ。われ力を果物に借ること多し。



日毎々々十顆の梨を喰ひけり

柿食うて洪水の詩を草しけり

（子規全集）

高濱虚子
本名清、明治七年伊豫松山に生る。俳人、子規の高弟。

根岸
東京市下谷區、子規庵のありし所。

彼
正岡子規を指す。

高濱虚子

八　柿二つ

高濱虚子

ランプの光は靜かに更けて行つた。時々上野の森に反響して轟き過ぐる汽車の音があるばかりで、根岸の夜は沈んだやうに淋しかつた。

日によつて不定ではあるけれども、この頃は一體に彼の熱は夜に入つて下ることが多かつた。夜半頃から再び上るのではあるが、その平熱になつた時の心持は、流石にすがすがしかつた。病主人の頭はさう云ふ時に一層透明になる

のであつた。彼は自分を神かと疑ふばかりの明快な判斷を數かぎりない句の上に下すことが出來た。句の良否は色の黑白の如く明白に、一見して立ちどころに判斷することが出來た。自分で自分をあやしむ位に、それが容易に且迅速であつた。

彼の淋しい家庭には、六十を過ぎた老母と、今年二十七になつてまだ嫁がない妹とがあるばかりであつた。老いたる母も、嫁期を失した妹も、唯主人の病を看とるために生きてゐた。二人は次の室の暗いランプの下で、病室の物音に耳をそばだてながら、めい〳〵默つて針を運んでゐた。やがて妹は膝の絲屑を拂つて立上つた。それは病む人

正岡子規像

の枕許に盆に載せた柿を運ぶためであつた。

「もうこれきりかい。」と彼はながし目にその盆の柿を見ながら聞いた。

「昨日あんなにお食べだからもうこれきりよ。」

と妹は答へた。盆の上にはただ二つしかのつてゐなかつた。

彼は總べてのものに健啖である中に、殊に果物を好んで食うた。中にも柿は飽くことを知らなかつた。

投書函の一掃
日本新聞の俳句欄に掲載の爲投書せられたる俳句を選する事。

彼は忽ち食指が動いたのだが、ただ二つの柿を今食つてしまふことは心細かつた。それは是非とも今日の大事業――投書函の一掃――が完了した時の慰藉の料に取つて置かねばならなかつた。彼は心のうちで呟いた。

「選がすんでしまつたら、この柿を御褒美に遣るよ。今一息だ。たゆまずに片附けてしまへ。」と。かくて漸く底の見えて來た句稿の選に、更に一心不亂に取掛つた。

燈火は主人の心を知るかのやうに、瞬もせず冴渡つた。傍の火鉢に炭のつがれた事も、時計が十二時を打つた事も、老いたる母の寢床に這入つたことも、彼は知らぬではなかつたがそれらは餘り深くその注意を惹かなかつた。妹が

子規筆蹟

柿

柿の実や口むし赤き鳥が来る
柿落ちて犬吠ゆる奈良の横町かな
渋柿やあら壁つゞく奈良の町
町あれて柿の木多し一くるわ

床に這入つたのはそれから一時間も後であつたが、それはその物音が兄の仕事の妨にならぬやうに、いつふせつたとも分らぬ位ひそやかであつた。靜かに沈んだ夜の呼吸が聞えた。彼の目は燈火に光り輝いて、この夜の色の中にひとり帝王のやうな威を示してゐた。最後に手に當つた草稿を見終つた後、彼は念のため投書

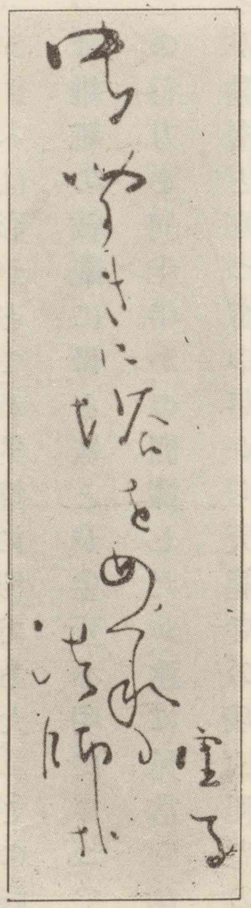
函をかき探して見たがもう其處には一枚をも留めなかつた。

彼は朱筆を投棄てたまゝ、兩手で頭を抱へて暫く身動きもしなかつた。

久しく心に掛つてゐた仕事を片附けてしまつた慄へるやうな滿足の情と、病軀に不相應な努力のあとに來る疲勞の恐とで、彼の心は暫く擾亂されてゐた。が、やがてその頭を抱へてゐた手をほどいて蒲團の外に現した彼の顏はいよいよ興奮して蒼白い皮膚の中にも、頰のあたりの赤みは色を増してゐた。

もう時計は二時を過ぎてゐたが、彼は少しも睡いとは思

虚子筆蹟
虫聞きに塔をめぐれる法師哉
虚子



はなかつた。燈火を中心としたこの病床六尺の天地は、今は何物にも煩はされることのない、極めて自由な、希望に充ちた世界の樣に思はれた。今や彼の體温は再び上つて、その爲にいつも酒に醉つた樣な興奮した心持になつてゐるのであるといふ事には氣がつかうともしなかつた。

彼は樂しげに盆の上の柿を見遣つた。柿の赤い色は媚びる樣に輝いてゐた。抑へてゐた彼の食慾は猛然として

愚　庵　俗名天田五郎、磐城國平の人、十五歲の時維新の奧羽戰爭に從軍中家鄕の親族離散、卅四歲の時出家す。明治卅七年歿、年五十一。

天龍寺　山城國葛野郡嵯峨村にある臨濟宗の巨刹。

峨山和尙　俗名橋本昌禎、天龍寺派管長。明治卅三年寂、年四十九。

振ひ起つた。彼は餓ゑた虎が殘忍な眼を光らせて兎を摑む樣に、忽ちその柿の一つを取上げて皮をむき始めた。

この柿は京都伏見の桃山に庵を結んでゐる愚庵といふ禪僧から贈つて來た釣鐘といふ珍しい名の柿であつた。さういへば形がどこか釣鐘に似てゐた。　この禪僧といふのは、維新の戰亂に母と妹とが生死不明になつてしまつたその行方を何十年かの間探したが、遂に見當らなかつたことが動機となつて、中年から天龍寺の峨山和尙の許に走つて僧となつた人であつた。　主人は既に數年前から交遊があつたのであるが、この禪僧も主人と同じく肺を病んでゐる上に、萬葉調の歌をよくし、又書に巧であつた。　俳句は作

萬　葉　奈良朝時代に成れる日本最古の歌集。

らなかつたが、それらの關係から互に推重して、何かにつけて贈答を怠らなかつたのであつた。　今度の柿は、桃山の草庵に禪僧を訪ねた人が、その庭前の柿を託されて、遙々と携へ歸つて病床に齎したものであつた。

それは昨日の事であつた。　その人がまだ枕頭に在る間に彼はもう辛抱が出來なくなつて、その柿を三つ續けざまに食つた。　その人が歸つた後も、夜寢る迄に十ばかりを平げた。　今夜枕頭に運ばれたものはその殘のただ二つであつた。　彼はその一つを取つてその皮をむくより早く忽ちそれに武者振りついたのであつたがもう大方食盡くして蔕の所に達したとき、少し顏を顰めた。　それは稍澁かつた

柿二つ　一五頁—一二二頁。大正四年五月、新橋堂發行。

落合直文

のであつた。さういへば昨日食つたのも大方は少しづつ澁かつたのであつた。けれども彼はそれに頓着せず、その蔕の所の際まで少しも殘さずに食つてしまつた。

三千の俳句を閲し柿二つ

當用日記に、彼は毎日の出來事を句にして十句宛書くことを日課にしてゐた。明日になつて今日の部を認める時に、忘れぬやうにこの句を加へねばならぬと思つた。疲勞が一時に出て來るやうに思はれて頭がぐらぐらした。彼は始めて熱の高いことを覺えたのであつた。（柿二つ）

九　萩の家

落合直文

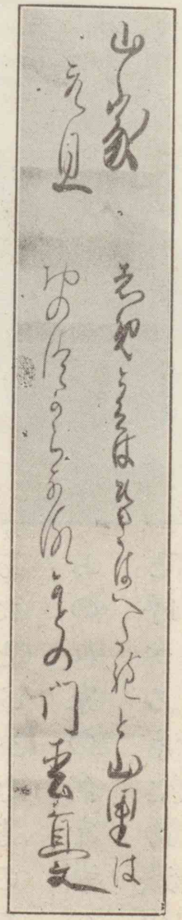
落合直文

仙臺の人。國文學者。明治卅六年十二月歿、年四十三。

おのが庭に一もとの萩あり。秋ごとにその色いと深く、枝などの茂れるさま、いみじううるはし。朝に起きてそをながめ、夕にたち出でてそれにうち向ひたる心ち、たとふべきものなし。おのれ家の名を萩の家と呼べるも、この萩の爲のみ。他にまた何の心かあらむ。一年飯田町に住みけるに、枝いたく生ひ茂りて、花もやゝほころびそめたり。明日明後日は咲きのさかりならむといひあへりしに、俄に野分の風吹きたちぬ。雨さ

直文筆蹟

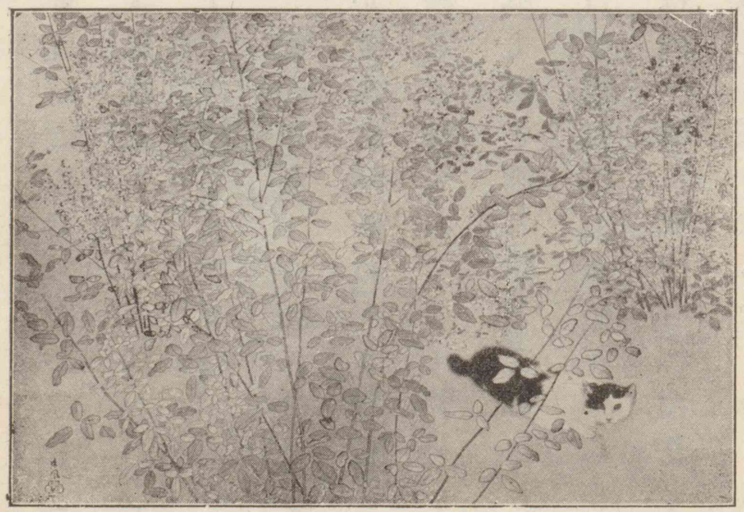
山家元旦
しめこそはひきはへたれど山里はおのづからなるかどの門松
直文



へ降添ひぬ。おのれは妹をかたらひ、共に庭におりたちて、そを防ぎぬ。「竹もてこ、その戸はづせ」など、うちとよめきたるその聲、今なほ耳にあり。その後ほどなく、妹は世になき人となれり。

定めなき旅のならひ、家を移すこと、一年に二たび三たびは常のことなり。佐土原町・拂方町・大門町など、幾度か移りたり。されどその萩ははなたず。今の掃除町の庭にあるも、やがてその萩なり。その萩は秋ごとに花咲けり。その

萩の圖



花、その色は舊時にかはることなし。ただその萩にうち向ふおのが心は、舊時にくらぶればいたく異なれり。そは妹のこの世にありし程は、萩の花はおのが心を喜ばしめしに、妹のうせにし後は、おのが心を悲しましむるが如し。さきの萩と今の萩とかはりあるか。いかでかその萩にかはりあらむ。さてはよろこばしといひ、悲しと

いふは、皆わが心からならむ。

明治二十四年九月三十日、午前九時ごろより、空のけしきただならずと思ひしに、雨降出で、風吹來りて、その勢おどろおどろしく、ひるつ方より、いよ〳〵はげしうなりぬ。おのれ高等中學校にありしが、萩のこと心にかゝらぬにはあらねど、授業ひまなく、午後二時ばかり家に歸りぬ。さて庭を見しに垣たふれ、壁くづれ、例の萩など目もあてられず。あはれ妹の世にありし頃は、風も防ぎ雨も防ぎてありしに、けふかくはかなくなしたるは、げに口惜しきかぎりなりとて、その夜は寢もやらず。さはいへ風に吹折られたりとて、その萩の幾部分は、必ずうるはしう咲くならむ。またことしの秋は咲かずとも、また來む秋は必ず咲くならむ。ただ悲しきは、かのかへらぬ人の上にこそ。次の日、この文を書きてありしに、例の下枝のあたり朝露こぼれたり。萩もまた心なきにはあらざらむ。

（落合直文集）

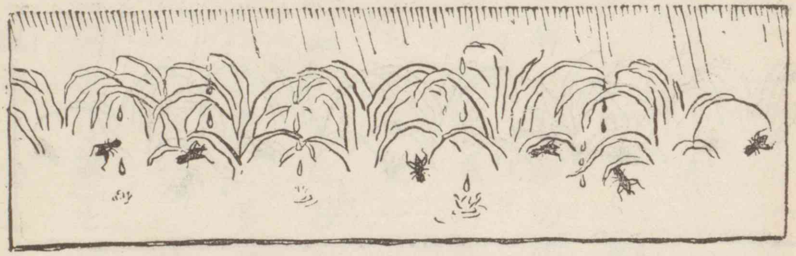
一〇　こほろぎ　　河井醉茗

こほろぎが鳴く雨と雫と。
暗い夜の
濡れた草の中に
たくさんのこほろぎが
高く鳴く、低く鳴く。

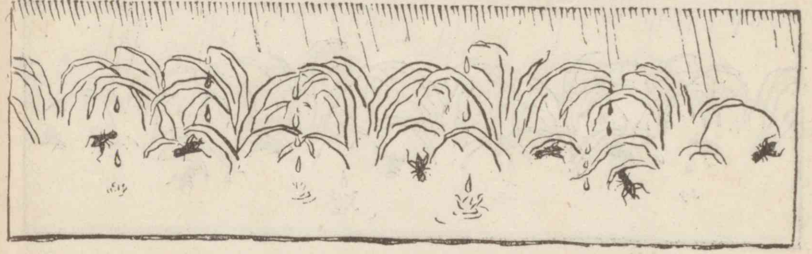
落合直文集　四三四頁—四三五頁。昭和二年十一月、明治書院發行。

河井醉茗　名は又平。明治七年堺市に生る。早稲田大學に學ぶ。詩人。

心もち褻れたやうな
ものしめやかな雨の言ひより、
さびしさの幸味はふ、
床の下に
こほろぎが鳴く、こほろぎが鳴く。
雨にうたれて鳴く聲の
つらさかなしさ。
休むこほろぎ
鳴くこほろぎ



忘れてうたふ音色の高さ
わか〱しさ。
やんだやうな雨の雫が
執着らしう
考へては落ち
考へては落ちると、
寢入りかけた夜が
ぱつちりと眼を開ける。
しめじめと



丘を越え、野を越えて、
わが傍に
歩みよる雨のさびしさよ
鳴くこほろぎの親しさよ。
かゝるとき
こほろぎの吹鳴らす
銀色の笛に聞惚れて
さまよひ出づる
さびしい姿を
つくづくと見る

あはれなうたの抱き心。
（醉茗詩集）

二　短歌評釋

若山牧水

専ら初歩の短歌愛好者のために、少しく現代の短歌の評釋を試みようと思ふ。それは、一つには廣く短歌を知らせるため、また一つにはこれを詠む上の參考にも供したいと思ふからである。

石崖に子ども七人腰かけて
河豚を釣りをり夕燒小燒
（北原白秋）

「夕燒小燒」とは、子供達が夕燒の時によく唄ふ歌である。それをそのまゝ持つてきてあるのだが、それがいかにもよ

醉茗詩集　二六八頁。大正十二年一月、アルス發行。

若山牧水　名は繁、宮崎縣臼杵郡の人、歌人。昭和三年九月歿、年四十四。

北原白秋　名は隆吉、福岡縣柳河町の人、明治十八年生。詩人。

く調和してゐて、わざとらしくない。そればかりでなく、これがあるために、夕燒小燒の海邊の石崖で、多くの子供達が一心に釣りいつてゐる光景が實に鮮明に、しかも潤ひ豊かに歌ひ出されてゐる。

青き實の蔭に椅子よせ春の日を
友と惜しめば薄雲の行く　（北原白秋）

木立の深い庭園に、青い果實を附けた一本の樹がある。その下蔭に椅子をよせて、親しい友とともに、言葉も少く暮行く春の日を惜しみかなしんでゐると、木の間に透いて薄い雲がしらじらと盡きず盡きず流れて行く。これが一首の大意である。

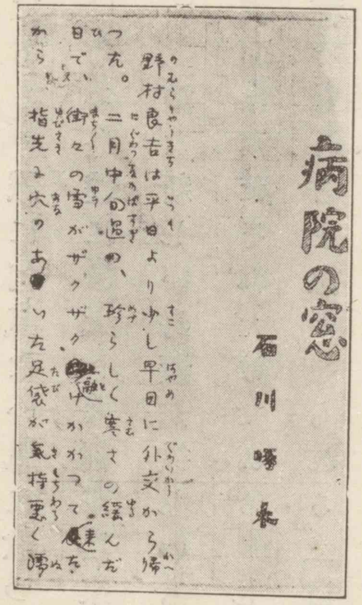
石川啄木　名は一。岩手縣の人。明治四十五年歿、年二十七。歌人。

新しきからだを欲しと思ひけり
手術の創の痕を撫でつゝ　（石川啄木）

これは啄木が晩年に腹膜炎で切開手術を受けた後の作である。誠に何氣ない風に歌つてある。「ひよつと見ると自分の身體には大きな創が出來てゐる。あゝ、創などのない立派な新しい身體が欲しいものだ。」といふのである。表面はただそれだけである。しかし、この作者の作だけに、種々なことを思はせられる。「自分の心は過去の種々な苦しい境遇にさいなまれて、濁り切つてゐる。それに今また身體にまでこんな創を受けて了つた。自分の前途は果してどうなるのか。」といふ遺瀨ない苦悶の情がその底を流

啄木筆蹟

れてゐる。一度ついた創は死に至るまで消えはしない。勿論その創がどんなに大きく深いものであつても、自分等は飽くまでもそれを征服して生きて行かねばならないので、徒らにその創を苦にして居るべきではないが、併し、人間の運命、不幸などに思ひ至れば、我等はこの歌をただ漫然と讀過することが出來ない。



稀にあるこの平なる心には
時計の鳴るも面白く聽く

（石川啄木）

和歌講話 六九頁以下「和歌評釋」より。大正八年一月、精文館發行。

若山牧水 名は繁。日向國臼杵郡坪谷村の人、歌人。昭和三年九月歿、年四十四。

自分としては極めて稀なこの平静な心には、聞馴れてゐるあの時計の音までが、いかにも興味深く聽きなされるといふのである。深い青海の底に、靜かに一尾の魚が尾鰭を收めてじつとしてでもゐるやうな、靜かな懷しい印象を受ける。かうした場合にあつた作者を想像する事によつて、我等は自づと我自らを懷しむ心の湧いて來るのを覺える。

（和歌講話）

三 短歌

若山牧水

わが顔もあかがね色に色づきぬ高原の麥は垂穗しにけり

秋霧の茄子の畑に人居りきやがて車を曳きて去りけり

石榑千亦

さみどりのうねりに乗りてきら〳〵と日に光りけり鷗の羽は

父もふみ母もふみけむ土の香のその香にしあれや懐しその土

太田水穂

こん〳〵と湧きてあふるゝ山清水いま落ちし松の葉を流しつゝ

おのづから歩みをとめて聞くものか薄のなかの冬川の音

中村憲吉

石榑千亦　名は辻五郎、愛媛縣の人、歌人。明治二年八月生。

太田水穂　名は貞一、長野縣筑摩郡廣丘村の人、歌人。明治九年生。

中村憲吉　廣島縣雙三郡布野村の人、歌人。明治二十二年生。

鋪道(いしみち)の並樹若葉にかぜわたり明るき街になりにけるかも

宵ふけてわが行く野べを草の家にくゝと鶏啼くあはれ月夜を

（現代詩歌新選）

現代詩歌新選　大正十四年八月、大同館書店發行。

一三　落葉の音

九條武子

雨かと思ふほど落葉の音がはげしうなりました。靜岡からおたよりをありがたうございます。もう稲はおくても刈りつくしましたでせう。野の菊、山の紅葉、此の頃の旅は夜は惜しうございますが御忙しい御からだゆゑ、ゆるりとした時間もあられませんでございましたでせう。木曜日には、皆様相かはらず御出であそばしますこととおなつ

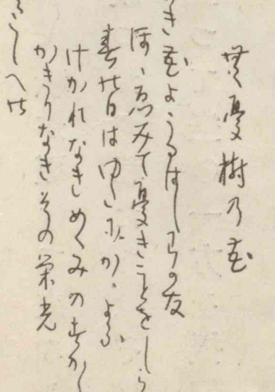
九條武子　九條良致氏夫人。京都西本願寺の出。歌人。昭和三年二月歿、年四十二。

落葉の音　大正十三年十一月五日、京都よりの書簡。

九條武子自畫像

かしう思ひやつてをります。いつも〳〵言うてはかゝせ代筆で失禮申上げてをりました。今日はかうして自分で書ける様になりました。風を引かぬやうにとの注意に今日は雨、また風が吹くとては一室に御隱居然と火鉢をかゝへさせられ、大きな空虚の中を、秋の車がから〳〵と狂ひながらまはつてゐるやうな、その音ばかりをしみじみと聞いて居りますのも却つて淋しさは深う感じます。はじめて鏡を見せてもらひました。櫛にかゝつた落毛、思はず目があつうなつて涙のやうなものが知らず知らずに

九條武子筆蹟



じんで參りました。それはかはいゝ小鳥でもあつたらば、巣にしてやりたい程もございました。ほんとにいくら久しぶりでも、つくづく病氣は致したくございません。つかれた頭でまとまりのつかぬ歌をそれでも毎夜一首二首とかきつけました。そのうち清書いたしまして願ひます。もう大丈夫になりましたから皆様にもぼつぼつ自分でおたよりを申上げられることと嬉しうございます。かしこ。

師の君

武子

師の君　佐々木信綱。
九條武子夫人書簡集　昭和四年四月、實業之日本社發行。
薄田泣菫　名は淳介、明治十年岡山縣淺口郡連島町に生る。詩人。大阪毎日新聞囑託。

御もとへ

（九條武子夫人書簡集）

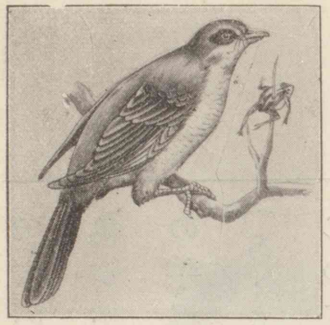
一四　小さな旅人

薄田泣菫

私たちが七つ八つの頃には、そろ／＼秋が更けて來ると晴れきつた空を毎日のやうに雁が渡つた。私たちはそれを見かけると吹きさらしの野路に立つて、空の一方を振仰ぎながら

雁よ棹になれ
棹になつたら鈎になれ

と、その長い行列が次第に雲の中ににじみこんでしまふま



もず

薄田泣菫

で聲を涸して叫んだものだ。が、いつの間にか雁も少くなつて、今では晝間その長い列が空を渡ることはよく／＼人氣の遠い野原かどこかでないとめつたに見られなくなつた。

その頃は又、後の岡に行つて見ると、葉の落ちかゝつた雜木林に渡鳥がどつさり來てゐたものだ。渡鳥といふと、私は海を越えて來る彼の小さな旅人の、あわただしい旅を考へていつも言はうやうのない淋しい旅心地を覺える。

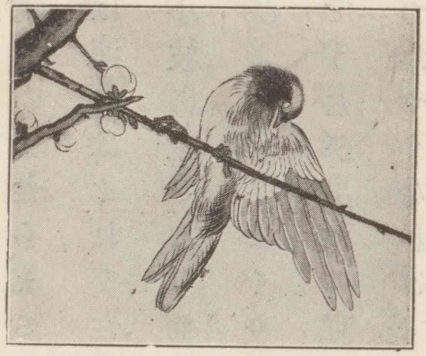
渡鳥の初客といつたら——さやうさ先づ百舌と

でもいつておかう。秋の彼岸が過ぎてそろ〳〵日影が黃色がかつて來ようといふ頃、私たちはどうかすると暖い日の午過、そこらの木立で甲高い鋭い聲を聞くことがある。「あゝもう秋だな。」と思はず振返つて見ると、矮小の櫟にまじつてずばぬけて背のひよろ高い楡の木に百舌が一羽止つて、黃色い夕陽を受けて羽が金のやうにきら〳〵してゐるのが見える。

蘆雁の圖

私たちはその瞬間、言はうやうのない強い健かな氣持が胸に流れるのを覺える。

百舌の次には鶲が來る。山家の午過、だるさうな蟋蟀の聲もいつの間にか止んで、枯葉一つ寢返を打つ音までがはつきりと耳に入る靜けさの底に、どこやら籠れた人の溜息とでもいつたやうな微かな聲が洩れて來て、何の音ともわからない。すると樹蔭の韮畑かどこかで、餘念もなくせつせと仕事に精を出してゐた農夫が、ひよいと顏を擧げる拍子に、すぐ鼻先の小枝から、枯葉のや

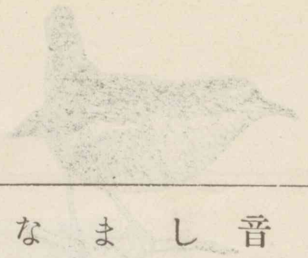


ひたき

うな小鳥がついと身をそらして逃げていつてしまふ。——それが鷚だ。

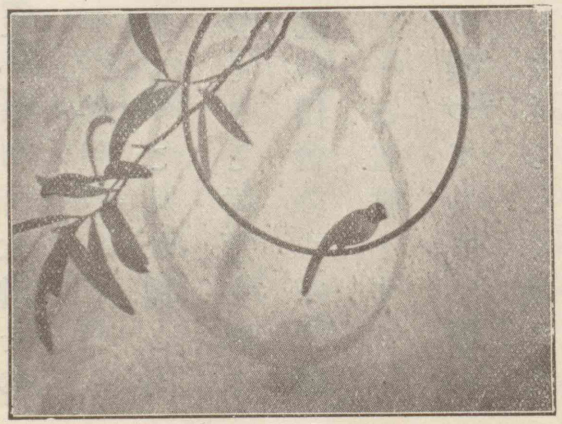
鷚といつたら、まるで悲哀でも抱いてゐる人のやうに、大抵は連にはぐれてたつた獨りで出て來る。そしてそこらの小枝に止るなり、何か眼に見えぬ昔馴染をでも招くやうに、ひよくりひよくりと輕いお辭儀をして、さゝやくやうな聲でうたひ出す。私はそれを見ると、他の爲、世の中の爲といつたやうなわけでなく、自分一人の爲にうたつて、それで滿足してゐる人たちを思ひ出さずにはゐられない。

鷚が來てものの十日も經たぬ間に四十雀が來る。この鳥は鷚と違つて十羽も二十羽も群をなして來る。山から

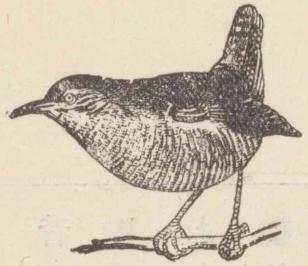


小禽

里へ移る折などには、まるで時雨でもするやうに、細かい羽音がさつと空を掠めて聞える。そしてそこらの木立におりるなり、めまぐるしいほどすばしこく、雀の甕などを啄きまはしながら、鼠色の背をそらし、柔かみのある胸の圓みを見せて、銀の鈴をふるやうな透通つた聲で早口にしやべり續ける。で、かうした大層な群の中には、きつとまだ羽の伸びきらない灰色の產毛そのまゝの雛兒が交つてゐて、どうかすると高い枝に止り損ねて、もんどり打つて



宙に返ることもあるが、そこは又慣れたもので、いきなりひよいと下枝につかまつて、ませた身振で樹肌のひびを啄いたりする。まるで山家育ちの、すばしこい、きさくな魂そのものを見るやうな氣持だ。



みそさゞい

小雪がちらつく頃になると鷦鷯が來る。これは鶲と同じやうに大抵獨法師で、それもこつそりと附近を忍ぶやうにして來る。冬初の午過、山近い田舍の小家で、爺さんは炬燵に潜り込んで、こくり〱と居眠をする。その側で婆さんはせつせと絲車を繰つてゐる。檐に吊した干菜の影が煤けた障子に見すぼらしく映つて、時をりちつぼけな小鳥の影がちらついたりする。ど

うかして絲目が切れて、睡さうな紡錘の音がばつたり止むと、こそ〱と掛菜をむしる音がする。が、老人の耳にそんな音の聽取れようはずがない。婆さんは俯いたまゝ、また絲を紡ぎにかゝる。……　さうかうする間に鳥は舌打をするやうな聲を立てながら、ひよい〱と小刻みに籬を傳つて、隣から隣へと狹苦しい物蔭を出たりはいつたりして移つて行くのだ。渡鳥の往來といふ事に餘程興味をもつた人でないと、どうかするとかうした鳥の消息はつい氣がつかずに一冬を過してしまふ事がある。

ほゝじろ

亥子　陰暦十月の亥の日。この日餅を食ふ時は萬病を祓ふといふ。

鶺鴒と後先になつて頰白が來る。私達の鄕里では亥子になると、いつも頰白が來るといひつたへてゐる。冷たい雨のびしよびしよと降る中を、獨者の頰白が灰色の胸までぐしよぬれになつて、しよんぼりとそこらの木にとまつてゐるのを見ると、私の國でこの鳥の啼聲を解いて、

一筆啓上つかまつる。
子供泣かすな火の用心。
今度の便りに金十兩、
やりたいけれども一文も御座なく候。

と言傳へられてゐるのを思ひ出して、しみじみと世渡りのむづかしさと、旅心の寂しさとを思はずにはゐられない。

畿內行脚　「紀念動物園」一九七頁―二〇二頁。大正八年九月、東京金尾文淵堂發行。

幸田露伴　名は成行、慶應三年(二五二七)江戸に生る。文學博士、小說家。

後の雜木林にこんな小鳥が來る頃になると、野らにはもうそろそろ鶲が來、鶫が來てゐる。（畿內行脚）

一五　うれしさ

幸田露伴

夜は更けたり。あたりは靜かなり。音するものは庭の落葉の風に舞ひくるひて、かさかさと鳴るのみなり。ひとり火桶をいだきて、燈の下にうづくまりながら、思ふともなしにさまざまのことを思ふ。

雨降らんとする空のいと暗き夕、寒風に吹送られながら、長々しき路を行盡くして、やうやく吾が家の門を望み得るあたりまで歸りつきたる時、尾をふりふり狗の馳出でて悅

び迎へたる狗もまことにうれしかるべく、主もまことにうれしかるべし。

憂しとも思ひ辛しとも思ひながら、その事を爲しはてたる後、浴みしたる時のうれしさ。

幸田露伴

思のほかなる爭などしいでて悔ゆれども及ばず、如何にせんと心を苦しむる折柄、圖らず驚き覺めて夢なりけりと知りたる時のうれしさ。

久しく讀まざりし書をひき出して、心ゆるやかに見る折から、情深かりし人の文の挾まり居たるに眼とまりて、十年

ほどの昔を今に繰返し見たるうれしさ。

蟲のためにいたく衰へたる樹を枝など截りつめて、活かさんものと念じけるに、多く芽をふき出して、勢よくなりたるを見たるうれしさ。

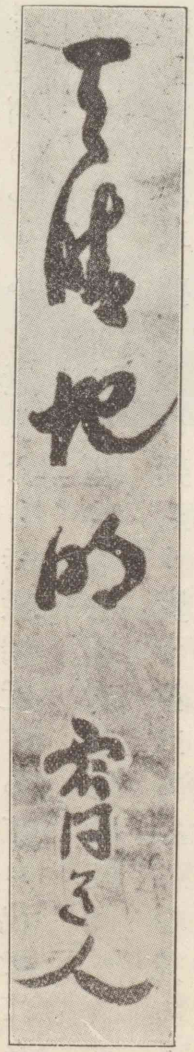
長き病のやうやく癒えたる時、縁端近くゐざり出でて、久しく見ざりし庭の面を見、天の色を見たるうれしさ。

親しき友の子・孫などの、美しう賢う生立ち行くを見るうれしさ。

むくつけき人の、思のほかに親にはいとやさしう仕ふるよし聞きたるうれしさ。

みづから種子を下したる草の、初花咲きたるうれしさ。

露伴筆蹟



天晴レ地明カナリ 露伴道人

わが言を用ひし人の、そのため幸福多くなりたりと聞きたるうれしさ。

自ら克たんとは思ひながら、慾の抑へがたさに克つあたはで歳月經たることを、一日遂に思ひきり得て、危き戰に勝ちたる心地したるうれしさ。

自ら箒を執りて清らかに庭掃きたる後直に落葉の一ひら二ひら、うめもどきの一顆二顆落散りたるを見ては、さすがに惱ましく思ふを免れざりしが、心をかへて觀れば、地に

長語

「火桶一三三頁—一三五頁。明治卅四年十一月、春陽堂發行。

箒目のあるがため、葉の散れるも實の散れるも趣をなしてをかしとも思ひなされけるうれしさ。

借りたる金を悉く返したる、なさでかなはぬことをなし果てたる、訪はでかなはぬ人を訪ひたる、讀みさしたる書を讀盡くしたる、皆うれし。

年も暮れたる大晦日の夜に、よろづのことをし果てて、あすのまうけも整ひたりなど思ひつゝ、取片づけたる居間の常とは樣異なりたるが中に、身を清めて正しく坐りたるうれしさ。

一月一日、父母・兄弟・姉妹皆打揃ひたるうれしさ。(長語)

小泉八雲 原名ラフカディオ・ヘルン。Lafcadio Hearn 西暦千八百五十年アイオニア列島リユカシヤに生る。明治二十三年來朝。明治三十七年九月歿、年五十五。

田部隆次 英文學者、小泉八雲の高弟。前女子學習院教授。

今日 明治二十六年六月七日。

角力町 熊本市の町。

一六　停車場で

小泉八雲原作
田部隆次譯

昨日福岡から電報で、そこで捕へられた或重罪犯人が、今日裁判の爲に、正午着の汽車で熊本に送られることを知らせて來た。一人の警官がその罪人護送の爲に福岡へ出張してゐたのである。

四年前の或夜、一人の强盗が角力町の某家に押入つて、家族をおどかし縛つて、澤山の貴重品を奪ひ去つたが、警官の爲に巧に追跡されて、その盗賊は二十四時間内に、贓品を賣捌く暇もないうちに捕へられた。併し警察署へ送られる途中鎖を切つて警官の劍を奪つて、その人を殺して逃げた。

小泉八雲

先週までそれ以上その强盗の事は何も分らなかつた。

所が熊本の探偵が偶、福岡監獄を見に行つて、その囚徒の中に、彼の頭腦に四箇年間寫眞を燒附けたやうになつて居る顏を見た。看守に向つて「あれは誰です。」と尋ねた。「此處では『草部』と記入されて居る竊盗犯です。」と答があつた。探偵は囚人に近づいて言つた。

「お前の名は草部ぢやない。お前は野村貞一。お前は殺人犯の件で熊本へ御用だ。」その重罪犯人はことごとく己

の罪悪を白狀した。

私は停車場へ到着する重罪犯人を目撃する爲に、大勢の人々と一緒に其處へ行つた。私はこの犯人に對する群集の憤怒を聞き又見る覺悟をしてゐた。そして、犯人に對して群集の暴力が振はれねばよいがと恐れてゐた。殺された警官は大層人望があつた。今その遺族や親戚は必ずこの群集の中に來てゐるだらう。そして、熊本の群集は甚だ穏かであるとは言へない。又私は澤山の警官が警戒に當つて居ることと思つた。併し事實は私の豫想を裏切つた。

汽車は、忙しさと騒がしさとのいつもの光景、下駄を穿いてゐる乘客の急ぎ足とからころ鳴る音、日本の新聞と熊本

のラムネを賣らうとする子供の呼聲のうちに止まつた。

私共は埒の外で五分間程待つてゐた。犯人は警官によつて改札口から押されて出て來た。頭をうな垂れて、繩で後手に縛られた大きな粗野な男であつた。犯人も警官も共に改札口の前に止まつた。群集は前に押出て、併し默つて、見ようとした。その時、警官は大聲で呼んだ――。

「杉原さん。杉原おきびさん。來てゐますか。」

背中に子供を負うて私の傍に立つてゐたほつそりした小さい女が「はい。」と答へて人込の中を押分けて進んだ。これが殺された人の寡婦で、負うて居る子供はその人の息子であつた。警官の手の合圖で群集は引下つて、犯人と警

官との周圍に場所があけられた。その場所に、子供をつれた女が殺人犯人と相面して立つた。その靜けさは死の靜けさであつた。

警官は、少しもその女には話さず、唯子供に向つてだけ話した。低い聲であつたが、大層はつきりしてゐて、私はその一言一句をも聞くことが出來た。――

「坊ちやん、これが四年前にあなたのお父さんをころした男です。あなたはまだ生れてゐなかつた。あなたはお母さんのおなかにゐました。今あなたを可愛がつてくれるお父さんのゐないのは、この人の仕業です。御覽なさい。」

こゝで警官は犯人の顎に手をやつて、嚴かに彼の眼を上げ

させた。「よく御覽なさい、坊ちやん。恐しがるには及ばない。厭でせうがあなたの務です。よく御覽なさい。」

子供は母親の肩越に、すつかり開けた眼で恐れるやうに見つめた。それから啜り泣を始めた。涙を流した。併し、畏縮しようとする顏を眞直にして、そして從順に、犯人をじつと見て、見て、見ぬいた。

群集の息は止まつたやうであつた。私は犯人の顏の歪むのを見た。そして、犯人が鎖で縛られてゐながら、突然倒れて、跪いて、其處に居る人の心を震はせるやうに、悔恨の情の極まつたしやがれ聲で叫びながら、砂に顏を打附けるのを見た。――

「御免なさい、御免して下さい。坊ちゃん。そんなことをしたのは怨があつてしたのではありません。逃げたさの餘り、恐しくて氣が狂つたのです。大變惡うございました。何とも申譯のない惡いことを致しました。併し、私は私の罪のために死にに行きます。死にたいのです、喜んで死にます。だから、坊ちゃん、憐んで下さい、堪忍して下さい。」子供はやはり、默つて泣いてゐた。警官は震へてゐる犯人を引起した。沈默の群集はそれを通す爲に左右へ分れた。それから全く突然全體の群集は啜り泣を始めた。そして、日に燒けたその警官が通る時、私は前に一度も見たことのないもの、滅多に人の見ないもの、恐らく再び見ることのないもの、卽ち警官の淚を見た。

（小泉八雲全集）

小泉八雲全集　第四卷。三〇一頁—三〇四頁。昭和二年二月、第一書房發行。

柳澤健　明治二十二年福岡縣若松市に生る。帝國大學佛法科出身。外務省書記官。詩人。

一七　童謠二篇

一、海のあなた

柳澤健

初めて登つた塔の上
高(たか)い高い塔の上

塔の上から眺むれば
丘越え野越えて青い海

青い海には黃金(きん)の船

日本童謠選集　大正十年十月、稻門堂書店發行。

ばら色の船　銀の船

船の行手はどこであろ
海のあなたは何であろ

脊伸びすれどもはてもない
青い青い海ばかり

船の行手はどこであろ
海のあなたは何であろ

（日本童謠選集）

二、山のあなたを

北原白秋

山のあなたを、
見わたせば、
あの山戀し、
里こひし。

山のあなたの
青空よ、
どうして入日が、
遠ござる。

トンボの眼玉 八六頁—九〇頁。大正八年十月、アルス發行。

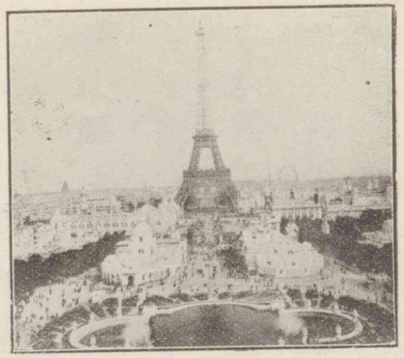
鶴見祐輔 群馬縣の人。元衆議院議員。

山のあなたの
ふるさとよ、
あの空戀し、
母こひし。
（トンボの眼玉）

一八　三都氣質

鶴見祐輔

フランス人は勤勉な國民である。イギリス人も勤勉な國民である。しかしその勤勉さには相違があるやうに思はれる。勤勉といふことそれ自身に本質的の差があるわけはないけれども、英佛人の勤勉性の差は、單に外形的な形式上の相違だけには止まらぬやうである。それは、一歩進



エッフェル塔（パリ）

んで英佛兩國民の國民性の相違から生ずるのではあるまいか。然らばその國民性はいかに相違してゐるだらうか。こんな事を考へながら、私は一人でよくパリの公園を歩いてゐた。更にこれにアメリカを今一つ加へてよく三國の國民性を比較して見た。

三國の特色はその三國の大都會の比較に於て著しく眼につく。それは、都會はその國の國民性を最も鮮やかに映し出してゐるからである。多くの人はニューヨークは餘りに歐洲化してゐるといふ。しかしニューヨークに

タイムスビルヂング（ニューヨーク）

ニューヨーク市の一部

一日ゐると、我々はアメリカの大空氣が全身に躍動するのを意識せずにはゐられない。ニューヨークはやはり米國である。そしてロンドンは英國であり、パリは佛國である。丁度東京が日本であるやうに。

話は又英佛人の勤勉性に還る。

朝早くパリの街を歩くと、石の鋪

トロカデロ宮殿（パリ）

道の上にはもう綺麗に打水がしてある。凱旋門のあたりの廣場には、花賣の露臺がいくつとなく立並んで、新聞賣の小舍とともに、心地よい朝の活動を象徴してゐる。黒い質素な着物を着た女たちが、耳に快いフランス語で笑ひ興じながら、忙しげに花に水を注いだりなどしてゐる。

ロンドンの下町に晝頃行くと、狹い側道の上に商館や銀行などの書記かと見える若者が、帽子も冠らずに、何百人となく、忙しげに往來してゐる。私はこの群の中

クールバン　Coulevain　佛國の女流小説家。西暦一九一五歿。

を縫ふやうにして歩きながら、遠い南アフリカや印度の貿易を算盤で彈き出してゐるこの人々の日常生活を考へた。そしてフランス人とは種類の違ふこの人々の勤勉さを考へた。　こんな時には、いつもフランスの小説家クールバンの言葉が腦裡に閃いた。「佛國人は蜜蜂のやうに勤勉に、英國人は蟻のやうに精勵である。」と。　パリとロンドンの生活を見てゐるうちに、この言葉の深い意味が、日一日と自分の頭腦に深く沁みていつた。　晴渡つた初夏の日盛に、寸刻の休もなく、花から花へ蜜を求めて翔つて行く可憐な蜜蜂の勤勉が、いかにもよく佛國人の心持を表して居り、來るべき冬の支度の爲、營々として重い餌を引摺つて行く健氣な

淺草の觀音堂　淺草區淺草公園にある金龍山淺草寺。天台宗、本尊は觀世音菩薩。

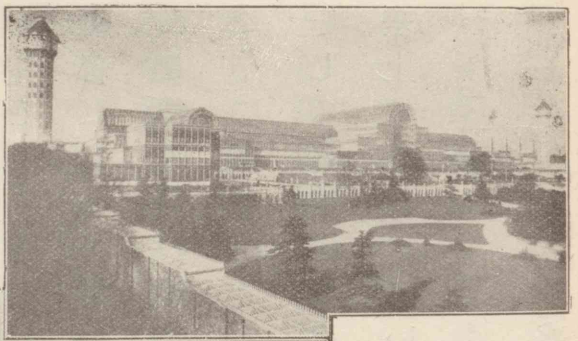
鶴見祐輔

蟻の精根がいかにもよく英國人の勤勉を表してゐるやうに思はれた。

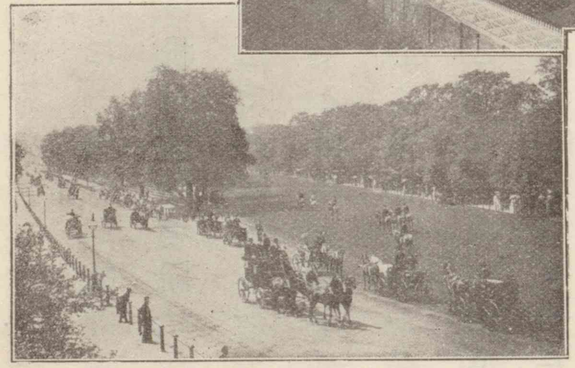
それならば、米國人のあのいら／＼した忙しさは、何に喩へられようかと考へて見た。　私の頭の中に、ふと淺草の觀音堂の鳩が浮んで來た。　いつ行つて見ても、大勢の人込の中で、幾十百羽の鳩が我劣らじと押合ひへし合ひ、地上の豆を拾つてゐる。　物音に飛立たうと、半分氣を外に配りながら、それでも眼前の豆粒は一つでも餘計に食へようと、眼の色を變へていつまでも餌を拾つてゐる。　米國

人の勤勉は正にこの鳩のやうに餘裕がないと私には考へられた。

朝の出勤時間頃にニューヨークの地下鐵道に乘る人々は、これがこの世ながらの阿鼻叫喚ではないかと思はれるやうな混雜を目擊する。或日、私は鐵道の切符を買ひに市内營業所に行つた。大勢の客が群集してゐた。係の若い米國人が、私の行先と列車とを聽取り、やがて右手の袖をちよつと捲り上げて、鉛筆持つその手を、切符の紙の上で左右に五六回激しく振つた。何をするのかと呆氣にとられて見てゐると、忽ちくわつと手を紙の上に落して、する〳〵と切符の文字を眼の廻るやうな早さで書終へた。手を振つ



水晶宮（ロンドン）



ハイドパーク（ロンドン）

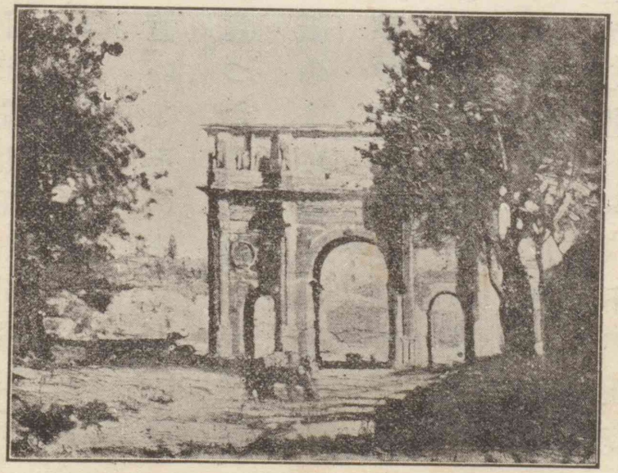
たのは、結局手に運轉をつける爲だつた。私は噴出すやうなをかしさを感じた。なにもさう手に運轉をつけないでも、大した時間の相違なく字が書けようし、又運轉をつける時間だけ無益のやうな氣がした。

その翌年、私は英國の商務院の鐵道局に、賃金

一覽表をもらひに行つた。　すると係の若い英國紳士が「たしかこの机の中に一枚だけ統計表を入れて置いたはずだ。」といつて、自分の机の抽出を開けた。　私は見るともなくその中をのぞきこんで見て驚いた。　まあなんといふ書類の雜沓だらう。　累々と種々な紙片が堆積せられてある。　それを件の若い紳士は、手を突つこんで、がさがさと搔廻して、「こゝにはない。」といつて、次の抽出、又その次の抽出を開け、そして最後の抽出の底から、やつと見つけ出した。「これは差上げるわけにいかないから、こゝで見て下さい。」といふから「一度見ただけではとても覺えられませんね。」と答へると、ちよつと當惑して「それでは私が寫してあげませう。」

といつて、それを別な白紙に筆寫し始めた。　ニューヨークならば、傍にゐる若い女のタイピストに命じて、一分間に寫させるところだが、件の若い紳士は、まづ自分の机の上の大きな吸取紙の上に原本の統計表を置いて、その上に白紙を當てて書出した。　私はちよつと面食つた形で、この異樣な淨書法を見てゐた。　すると、彼は白紙の上に數字を一行書いた。　そして今度はその白紙を左手で持上げて、下の原本をのぞいて次の行の數字を諳記して、又白紙をその上にべたりと置いて、諳記しただけ書いて、又前のやうに紙を持上げて原本をのぞいて、又その上に重ねて書いた。　不思議な遣方だと見てゐると、やがて書終へた。　インキが乾いてゐ

ない。そこで、今度はその紙と原本と二枚持上げて、一番下敷になつてゐる吸取紙の上に裏向に置いて、丁寧にインキを拭取つて、さて私にその淨書をくれた。ニューヨークから着いたばかりの私は、全く呆氣にとられて、こゝを出て行つた。そして幾回となく、鉛筆持つ手を振つて運轉をつけて、猛烈な勢で切符の文字を記入した米國人と較べて考へて見た。



凱旋門（パリ）

三都物語「蟻と蜜蜂と鳩」二頁—八頁。大正十二年五月、丁未出版社發行、

その春パリの郵便局に書留小包を出しに行つた。慣れない私は、誤つて受取人の欄へ自分の住所姓名、差出人の欄へ先方の住所姓名を書いた。これを局の小窓から差出す時、私はふと氣づいて「おや。」といふと、局員の佛國人がつとペンを取つて、受取人といふ字をすつと抹消して差出人と書き、差出人といふ字をすらりと消して受取人と書いた。なるほどこれで送票は完成したわけである。しかもそれがほんの一瞬間だつた。私は全く感服してしまつた。そしてニューヨークの切符賣と、ロンドンの役人とパリの郵便局員とを頭の中で列べて見た。鳩と蟻と蜜蜂と。

（三都物語）

柴田鳩翁 江戸時代の心學者。名は亨。京都に生る。中年にして明を失す。天保十年歿、年五十七。

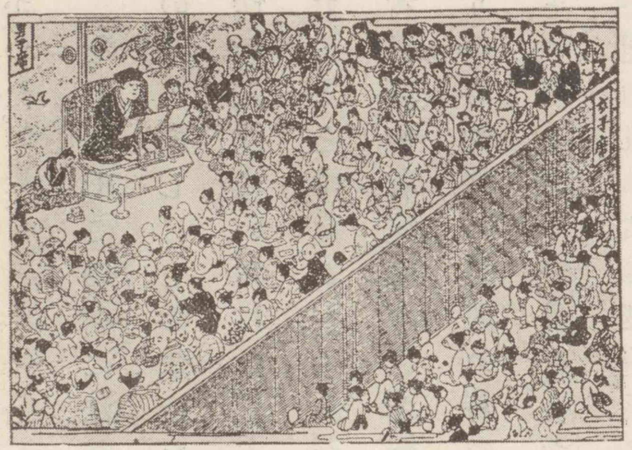
一九 鳩翁道話

柴田鳩翁

一

或山家から京の町へ談義僧を招待に參りました。折ふしその日は雨降りで、道も悪いので、駕籠をもつて迎に來ました。和尚もやがて用意して駕籠に打乘り、京を離れて、三四里ばかりと思ふ處で、どうしたことか駕籠の底が拔けました。いたはしや和尚は袈裟も衣も泥まぶれになられた。迎の人足も氣の毒がり、そこら駈廻つて、繩ぎれ多く拾ひ來りて、やう〳〵と駕籠をからげ、さて和尚に「お乘りなされ。」といふ。和尚も氣味悪けれど、雨は强し、袈裟・衣はよごれる、

晝中に歩くも外聞悪く、ふしようぶしように駕籠に乘る時、


心學道話の圖

「これ駕籠の衆、もう底は拔けはすまいか。」「いえ〳〵、氣づかひはござりませぬ。」といふ。乘移る舁上げるの拍子で、また底がめきめきいふ。和尚大きに肝を潰し、「これではなか〳〵安心がならぬ。御苦勞ながら、合羽の上から今一度、丈夫に繩がらみにして下され。」といはるゝ。人足も尤もに思ひ、また繩ぎれを拾ひ集め、合羽の上を竪横十文字にからげ「こ

れであやまちはござるまい。」と道を急いで或村を通りかかつた。

をりふし、この村に法談があつたと見え、參詣の老若、道場の歸りあしに、この駕籠を見つけて、肩衣をかけたる親仁が、傍の人達にいふには「なんと皆の衆、今日の御勸化はありがたいことではござらぬか。いかさま無常迅速の世の中、生者必滅・會者定離のことわり、なんどき如來樣のお迎があらうやら知れぬが人の身の上、あれあの駕籠を見さつしやれ。どうでも京へ奉公に往た人が死んだと見えて、死骸を在所へ連れていぬると見える。さてもはかないものぢやござらぬか。」といふ聲を、駕籠に乘りたる和尚が聞きつけ、さて

は我を死人と心得たか、いま〳〵しいと、わざと駕籠の中で咳拂すると、かの老人はこの咳拂に驚き、急にわきへ飛びのき、小聲になりて「死人ぢやと思うたら、どうでも科人ぢやさうな。めつたに側へ寄るまいぞ。」といふ。和尚愈腹を立て、今はたまりかねて駕籠の中でぢだんだ蹈み、大聲あげて、「科人ではをりない。」といふ。その聲にまたびつくりして、「さては科人ではなうてどうでも氣違ぢやさうな。」といはれた。

これが面白い話ぢや。何分駕籠を外から繩がらみにしたものゆゑ、誰に見せても死人ぢや。しかるに中から物いへば、科人といふもことわり、また氣違ぢやさうなといふの

も、外からこじつけていふのではない。皆この方にその姿の模樣があるによつてぢや。これでよう御合點をなされませ。善いものを惡いとは人はいはぬ。何事も省みるのが肝心ぢや。或人の道歌に、

世の中は何もいはずにいよすだれ
　そのよしあしは人に見えすく

二

或處の旦那殿が、臺所に居眠つて居る長吉を呼起して「これ長吉、御客樣がもう御歸りなされた。奥にある酒や、肴を臺所へ運んだがよい。」長吉目をこすり〳〵、ふしようぶしように返事をしながら、奥へ往て、そこらを見れば、硯蓋やら、

小鉢やら、うまい物の勢揃。こはいものぢや、誰が催促もせぬに、目の玉がきよろつき出し「なんぢや、こいつは、うまさうなものがたんとある。硯蓋は卵の卷燒、たつた一切ほか殘つてない。よう喰ふ客ぢや。こいつは何ぢや。ははあ、蒲鉾ぢやさうな。」と、一切つまんで口へほゝばり側を見れば飯蛸が七つ八つ、南京の丼の中に、車座に坐禪して居る。「こいつはえらい。」と撮むところへ、旦那の足音。これではならぬと袂へ押込み、銚子・盃をうつむいてとる拍子に、飯蛸が袂から、ころ〳〵。

旦那目早く「それは何ぢや。」長吉ぬからぬ顏で疊をたゝいて「一昨日來い。一昨日來い。」と申しました。なんぼ蛸

蛛あしらひにしても、飯蛸は蜘蛛には見えぬ。隠れたるよりあらはるゝはなしぢや。これぢやによつて、人の心は隠されませぬ。心に怒があると額に青筋がたちまする。心に悲しみがあると目に涙が浮び、心に嬉しみがあると、ほゝべたに靨が入り、心にをかしみがあると笑顔になりまする。これ皆、心よりして顔へ出まする。目に涙が出て心が悲しうなるのではございませぬ。額に筋が立つてあとから腹の立つのではございませぬ。何事も心がさきぢや。其の心に思ふ處は皆かたちへあらはれまする。これを「うちに誠あればほかにあらはる。」と申します。なんと、これでも、心のゆがみが隠されるものでございませうか。口答も心

の煩、鼻うたも心の煩、早う養生を致しませぬと、本復がむづかしい。もし大病になりましては、耆婆・扁鵲が配劑でも、どうもいたし方はございませぬ。さるによつて、その大病にならぬうち、心學をおすゝめ申しまする。一度本心を御直し下されますと、奇妙なものぢや、ちよつとした身贔屓、身勝手でも直に胸へこたへまする。

これについて、ある人、さる兩替屋の主人の得意の話なりとて申されたるは、「兩替渡世は、金銀の善悪を見分くるが肝要ぢや。その見分け様を小者に教ふるに、その家々にて違あれども、この兩替屋の主人の教方は、初より少しも悪銀を見せず、たゞよろしき銀を日々に見せ置き、確とよき銀を見

耆婆　印度古代の名醫。
扁鵲　支那周代の名醫。

覺えたる頃、そと悪銀を見すれば忽ちに悪しき銀と知ること、鏡を照して物を見るが如し。これ一目下に、悪銀と見極むることは、最上の銀を見覺えたる故なり。かくの如く教ふる時は、この小者、生涯悪銀を見損ずる事なし。」と申されたるよし承りました。このはなしの眞僞は存じませねども、道理においては成程尤もな教へ方實にあぶな氣のない稽古でござります。併しながら最上の銀を見覺えても、半季一年、外商賣をして、金銀を取扱はぬと、又もとの素人方同様になりて、善悪を見分くる事が出來ませぬと申されました。これでよう御合點をなされませ。

ひとたび本心を見覺えますると、そのあとから、少しばかりの身贔屓、身勝手が出來ても、直に知れる。なぜなれば、本心の明らかなる、無理の無い事を見覺えた故、ちよつとでも無理らしい事は、中々受附けるものではござりませぬ。併し又本心に遠ざかり、本心を見忘れると以前のとほり、眞暗になつて、悪銀が見えにくうなりまする。御用心をなされませ。　悪うすると、本心ぢややら、悪心ぢややら、我とわが手に合點がゆかず、そのくらい心から思ひつく程の事が、思ふ様にゆかぬと、はあすう／＼と肩で息をせにやならぬ。難儀なものぢや。　せめて、默つてなりと居ればよけれど、かりそめにも苦しいせつないと、腹の中のゆがみを、人に逢うては白状を致しまする。　さりとては困つたものぢや。これ

ぢやによつて、何とぞ一度本心の正銀を見覺え、人欲の惡銀を見損ぜぬやう、どうぞ御互に、一生道に離れぬ樣にいたしたうございます。

（鳩翁道話）

二〇 小品二題

霜

島崎藤村

毎年十月の二十日といへば初霜を見る。雜木林や平坦な耕地の多い武藏野へ來る冬、淺々とした感じの好い都會の霜、さういふものを見慣れてゐる人に、この山の上の

鳩翁道話 有朋堂文庫本「心學道話集」に據る。

島崎藤村 明治五年長野縣筑摩郡神坂村に生る。小說家、詩人。

霜を見せたい。　桑畑へ三度か四度も霜が來る。桑の葉は忽ち縮み上つて燒ける。實際猛烈な冬の威力を示すものはあの霜だ。　そこへ行くと、雪の方はまだしも感じが柔かい。　降積る雪は寧ろ平和な感じを抱かせる。

十月末の或朝のことであつた。　私は家の裏口へ出て、深い秋雨に色づいた柿の葉

藤村集
千曲川のスケッチ「落葉の二」現代文學全集五九頁。昭和二年三月、改造社發行。

が、面白いやうに地にふるのを見た。肉の厚い柿の葉は、霜に燒けそこなはれたり、縮れたりはしないが、朝日があたつて來て霜のゆるむ頃には、重さに堪へないで、脆く落ちる。暫く私はそこに立つて、茫然と眺めてゐたくらゐだ。そしてその朝は殊に烈しい霜の來たことを思つた。

藤村集

長塚節（たかし）
歌人、小說家。茨城縣結城郡岡田村の人。大正四年歿、年三十七。

長塚節

木枯

長塚節

烈しい西風が、目に見えぬ大きな塊をごうつと打ちつけては、又ごうつと打ちつけて、皆痩せこけた落葉木の林を一日苛め通した。木の枝は時々ひゆうひゆうと悲痛な響を立てて泣いた。短い冬の日はもう落ちかけて、黄色な光を放射しつゝまたゝいた。さうして西風はどうかするとばつたり止んでしまつたかと思ふ程靜かになつた。泥をちぎつて投げたやうな雲が不規則に林の上にじつとひつついてゐて、空はまだ騷がしいことを示してゐる。

長塚節全集　第一卷。「土」一頁―二頁。大正十五年九月、春陽堂發行。

秋田雨雀　名は德三。明治十六年青森縣津輕郡黑石町に生る。早稻田大學英文科出身。

それで時々は思ひ出したやうに、木の枝がざわざわと鳴る。世間が俄に心ぼそくなつた。（長塚節全集）

二　牧神と羊の群

秋田雨雀

登場する者

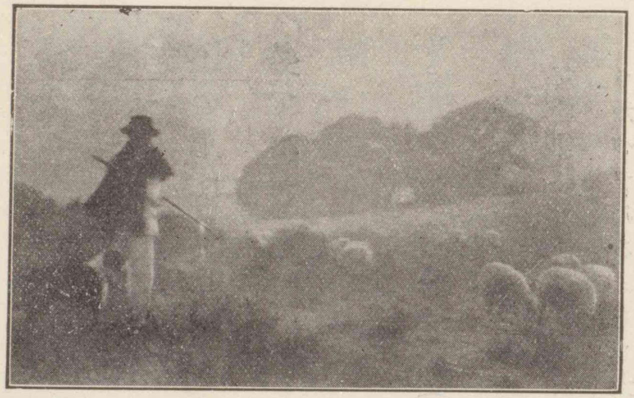
牧神　白い髮、白く長い鬚、腰には獸の皮を卷き、手に太い杖を持つてゐる。

草の精　大ぜい、美しい少女。

羊の群　頭に羊の冠を戴いてゐる。少年によつて扮せられる。

馬の群　頭に馬の冠を戴いてゐる。やゝ大きな少年によつて扮せられる。

牧羊



牛の群　頭に牛の冠を戴いてゐる。これもやゝ大きな少年によつて扮せられる。

第一部　午後――夜

第二部　晴れた朝

これは北國の湖に添うた、ある大きな牧場の出來事である。そこには、年とつた牧場の神樣が五十四の羊と六十頭の馬と四十頭の牛を飼つてゐた。「牧場の神樣」は、毛皮を腰に卷いて、いつでも大きな太い曲りくねつた杖を持つて

ゐる。一年が幾つになるのか誰も知らない。牧神はちよつと見ると大へん氣樂で毎日遊んで暮してゐるやうであつたが、なか〳〵さうではなかつた。五十四の羊、六十頭の馬、四十頭の牛を見守つてやるためには、並大抵の苦勞ではなかつた。

第一部（午後――夜）

廣い牧場の少し小高い丘の上。夏の終秋の野原には草が伸びられるだけ伸びてゐる。正面の森の中では小鳥が枝から枝へ飛びはねて歌をうたつてゐる。もう太陽が傾きかけてゐる。牧神は石に腰かけて眠つてゐる。やがて丘の下の方で互に言爭ふ聲が聞える。土を打ち石を投げる音がする。

牧神（靜かに眼を開いて、その方を見おろす。そして悲しさうな顏をする）

また子供等は喧嘩を始めたな、馬鹿な奴等だ。みんな湖の岸から山の上に登つて來る。あのトンマな牝牛の奴までが血眼になつて荒廻つてゐる。子馬は何にも知らず、夢中になつて谿の上から石を投げつけてゐる。この廣い綠の野原に住んでゐながら、何が不足で喧嘩をするのだらう。

（この時牛の群と馬の群との爭が聞える。）

馬鹿な奴等だ。あいつ等はあいつ等相應な理窟を言つてゐるわい。

（間もなく三頭の牛と三頭の馬が舞臺にあらはれる。）

牧神 (悲しみを隱すやうに微笑を浮べて) 一たい、どうしたといふのだ。

牛の一 (頭を下げながら) どうぞ、あなた樣、聞いてくださいまし。あの大喧嘩以來、私どもは、なるたけ喧嘩をいたしたくないと思ひまして、我慢に我慢をしてをりましたが、この馬の仲間が、あんまり亂暴なことばかり、いたしますものですから、つい……。

馬の一 (同じく頭を下げて) いえ、どうぞ、聞いてくださいまし。亂暴なことをいたしましたのは、私どもではございません。奴等こそ不屆なことをいたす奴でございます。

牧神 一たいどうしたといふのだ。お互にさう言張つて

ゐるばかりでは、さつぱり譯が分らないではないか。(牛の一に向ひ) 一體どうしたといふのだ。

牛の一 實は、けさ、私どもが朝早く起きて小川の水を飲まうといたしますと、水が泥で眞赤になつて、とても飲めさうにもないのでございます。そこで、私どもが何氣なく山の上を見ますと、馬の奴等がみんなして、小川に石を投げたり、崖を崩したりしてゐるのでございます。

牧神 (馬に向ひ) お前達は、なぜそのやうなことをするのだ。

馬の一 實はその小川は私どもの小川で、もとは、その小川に添うて湖のところまで下りて行かれたのでございますが、牛の奴等は柵を越えて、私どもの水を飲みに來るので

ございます。牛の奴等こそ亂暴な奴等でございます。

牛の一　いえ、あなた樣、お聞きくださいまし。あの小川の縁は五六年前あなた樣のお立合の上で、あの可哀さうな羊の奴等に讓つてやつたところでございます。（懷から地圖を出して）この地圖を御覽くださいまし。こゝにちやんと印がつけてございます。

馬の一　（せきこみながら）それなら

牛のむれ

ば、なぜ柵を越えて他人のところの水を飲みに來るのでございませう。私はあの羊の奴等が可哀さうでなりません。

牧神　（悲しげに雙方を見て）お前達のいふことはよく分つた。さういふ話を聞くと、私は寂しい氣持になる。私はまだお前達が赤子の頃から、心配をしい〴〵けふまで育てて來た。お前達は赤子の頃は、誰も彼も仲よくして、この野原で遊んでゐた。私はそれを見て、いつでも喜ばしく思つてゐた。併し私は、いつかかうしてお互に喧嘩をするやうになるだらうとは思つてゐた。いや、お前達の親達の時代から、私にはそれがちやんと分つてゐたのだ。お

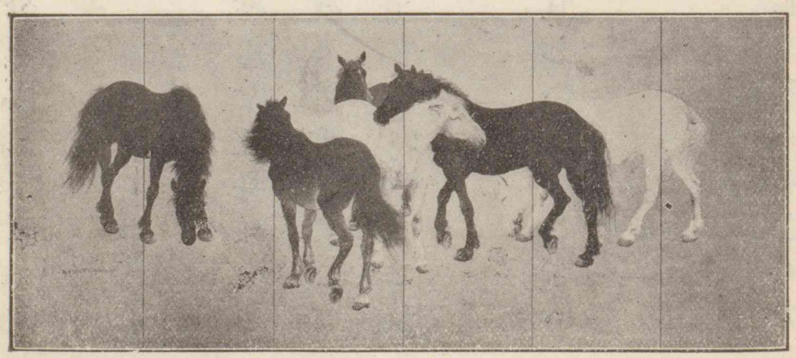
前達は知らないけれども、お前達の先祖はあの山の蔭にゐたのだ。あすこは燒け山で、草も木も餘り生えてゐなければ、このやうな美しい小川もなかつた。お前達の先祖は、それでも、仲よくして一生懸命に働いてゐた。私はそれが可哀さうだと思つたので、お前達の先祖を、この廣い綠の野へつれて來てやつたのだ。ところが、お前達は、自分のいゝ性質を少しも發達させないで、一番惡い性質だけを發達させて來た。私はもうお前達には用のない者になつてしまつた。（と言ひながら立上る。）

（牛と馬とはあわてて牧神を留めようとする。）

お前達の先祖をこゝへ連れて來た時は、私はお前達が

もつとよくなるだらうと思つてゐた。お前達には他の動物の持つてゐないものがある。一つは「智慧」で、一つは「感情」だ。世の中には、お前達よりも、もつと強い者が幾らもゐる。併しさういふものにはお前達の持つてゐるやうな美しいものがない。あの獅子を御覽、虎を御覽、熊を御覽。またあの象を見るがいゝ。あれ等は、お前達よりどれだけ強いか知れない。併し、あゝいふものはみんな自分で亡んで行つてし

馬のむれ



まふ。力のあるものは、自分の力で自分を亡してしまふのだ。

(この時丘の下の方で大ぜいのものの罵りあふ聲が聞える。)

馬の一　あれ、あのやうに私どもの兄弟がみんな死身になつて爭つてをります。あなた様のお說教も御尤もでございますが、私どもには、この際どうしようもないのでございます。

牛の一　一たい私どもはどういたしたら宜しいのでございませう。

(牧神は絶望的に雙方を見る。)

牧神　そんなら、行つて爭ふがいゝ。そしてみんな亡んで

しまへ、力を誇るものは自分の力が自分を亡すだけのことだ。

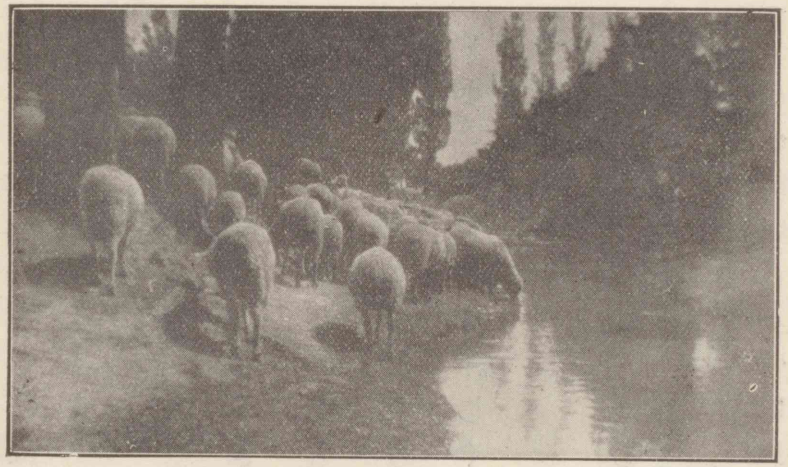
(牧神は淋しく言放つて席を起つてゆく。)

馬の一　どうぞお許し下さいまし。今度一度きりで、私どもは、永久に爭はないつもりでございます。

牛の一　私どもも、今度だけは全く仕方のないことでございます。どうかお許しくださいまし。永遠の平和のためでございます。

(牛馬の群は雙方異なつた方向に走つて行く。この時、野も丘も、一面に夜となる。そして闇の中で永い間動物の爭ひあふ音が聞える。)

羊のむれ



第二部　晴れた朝

牧神（悲しみの上に温容を浮べて羊の群を見る。）ゆうべは悲しい晩であつた。お前達はよく怪我をしなかつた。あの馬鹿者どもは自分で自分を亡してしまつた。さぞ恐しかつたらうな。

羊の一　ほんたうにゆうべは恐しうございました。私どもはあの小さな柵の中に一塊になつてぶるぶる慄へてをりました。

羊の二　それでも、こはごはあいつ等のすることを見てをりますと、それは〳〵恐しいことばかりでございました。一方は谿の上から石や大木を投げつけてよこしますし、また野原からは牛の奴等が角を振立てて無二無三に山を目がけて突進して行くのでございます。中には横腹を敵の角に突かれながら、一緒に重なりあつて谿底へ落ちて行くものもあります。さうかと思へばお互に取つ組みあひながら、だんだん力が盡きて、そのまゝ息の絶えて行くものもございました。私どもの仲間にも、ずゐぶん怪我をいたしたものもございますが、まあ〳〵それだけで濟んだといたしますと、仕合と申すものでございま

す。

牧神 さうだ、私は、ゆうべから、お前達のことを心配してゐた。しかし、まづ無事でゐてよかつた。いつかお前達は私のところへ來て、なぜ私達にもつと強い角と鋭い牙を與へて下さらなかつたのかと言つて愚癡をこぼしたことがあつたな。その時私は、もしお前たちに「もつと強い角と鋭い牙」があつたら、お前たちはもつと不幸になつてゐたらうと言つたことを覺えてゐるか。もし

羊かひ

お前たちはもう少し強い動物であつたら、ゆうべのうちに、あの馬鹿者どもと一緒に血を流したり、谿へ落ちたりして死んでしまつてゐたかも知れない。御覧、ちやうど、太陽が上るところだ。

あの馬鹿者どもは、少しばかりの地面や、少しばかりの自分の利益のために、けふの太陽を見ないで死んで行つてしまつた。——可哀さうな奴等だ。

草の精（森の中から歌ひながら出て來る。）

照る〳〵お日樣、
眞赤な〳〵お日樣、
金の冠銀の杖。

くる〱廻れ、
牧場の姫子、
赤い冠に青い裾。
照る〱お日樣、
眞つ赤な〱お日樣、
金の冠銀の杖。
くる〱廻れ、
牧場の姫子、

現代日本文學全集 第三十三卷「少年文學集」秋田雨雀篇四二七頁—四三〇頁。昭和三年三月、改造社發行。

短い命の果てるまで。
照る〱お日樣、
眞赤な〱お日樣、
金の冠銀の杖。
くる〱廻れ、
牧場の姫子、
冷い小霜の降りるまで。

（現代日本文學全集）

志賀直哉 明治十六年、宮城縣白石町に生る。小說家。

向島 尾道市の向にある島。

二三　瀬戸内海

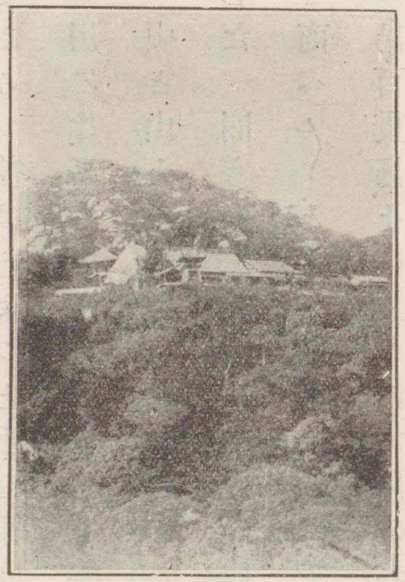
志賀直哉

春めいた長閑な日だつた。前の石垣の間から大きな蜥蜴が、長い冬籠の大儀さうな身體を半分出してじつと日光を浴びてゐる、さういふ午前だつた。彼もいくらか輕い心持で前の障子を一ぱいにあけ、朝晝一緒の食事をしてゐた。向島の山の上には青くうつすりと四國の山が眺められた。彼はふと旅を思ひ立つた。そして旅行案内を出し、讃岐行の船の時間などを調べた。

千光寺 尾道市の背後なる大寶山の中腹にある眞言宗の寺。

細長い市 尾道市。

翌日は薄日のさした寒いいやな日だつた。空模樣も本當でなく風もあつた。彼はちよつと迷つたが、やはり出かけることにして、一時半頃汽船の出る處へ行つた。



着くのが三十分遲れた爲に、それだけ二時發から遲れて船は出發した。彼は祖父の着古したきたない二重廻しを着て、甲板へ出てゐた。船は細長い市(まち)に沿うて東へと進む。千光寺の山の中腹に彼の小さい家が一層小さく眺められた。さつきまで着てゐた綿入

と羽織とが、軒の物干竿にさがつてゐる。それもいかにも小さく眺められた。その前に婆さんが腰かけて此方を見てゐる。彼はちよつと手を擧げて見た。婆さんもすぐ不器用に片手を擧げた。そして笑つてゐるらしかつた。

山と山との間の一番奥にある西國寺といふ寺が見え出した。

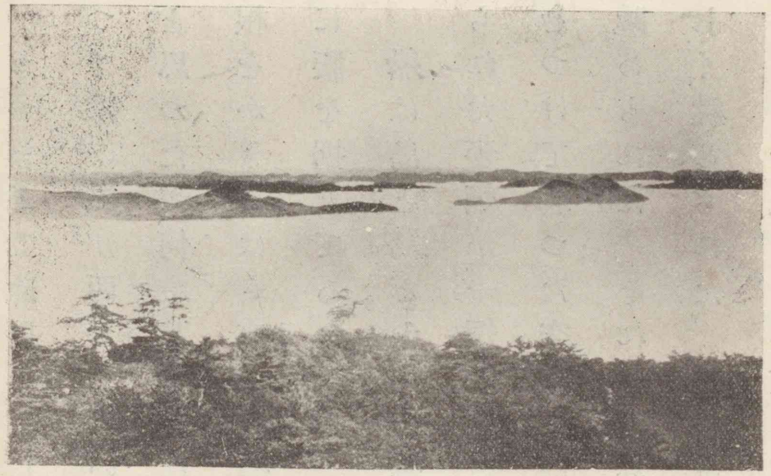
間もなく船は淨土寺の前を過ぎ、市を出はづれて舵を南へ〱ととり、向島を廻つて沖へ出て行つた。彼は院の島・百貫島、そのくらゐで島の名を知らなかつた。しかし島は一つ通り越すと又一つと竝んでゐた。島と島との間を見通せないので、ただ船で通つては、彎曲の多い海岸を見ると餘り變りなかつた。

さつきまで薄日のさしてゐた空はいつかどんよりと曇つて、寒い風が西から吹いてゐた。彼は船室へはいらうかと思つたが、何かしらそれも惜しい氣持から二重廻しの羽根をかき合はせ、立てた襟に頤を埋めて、なほ甲板のベンチに腰を据ゑてゐた。

船は島と島との間を縫つて進んだ。島々の傾斜地に作られた麥畑が、一畑ごとに濃い線、淡い線とはつきりくぎりをつけて、曇つた空の下にビロードのやうに滑かに美しく眺められた。それから、島々の峯の線が、いかにも力強く美しく眺められた。曇日を背にした方が殊に輪廓がくつきりとよく見えた。

彼は市の瓢箪屋で見た割瓢の割目の線

屋島より見たる瀨戸內海（其の一）



阿武戸　廣島縣沼隈郡。鞆の津の西一里。

を想ひ出した。自然の作る線、これにはやはり共通な力強さ、美しさがあることに感服した。

或島は遠く或島はすぐ側を通つた。少し人家のある濱邊には、出鼻の潮風に吹きまげられた一二本の老松の下にきつと「常燈明」と深く刻りつけられた古風な石の燈臺が見られた。

阿武戸の觀音といふのが見え出した。それは陸と島との細い

屋島より見たる瀨戸內海（其の二）

海峽の陸の方の出鼻にある。拜殿が陸にあつて、奥の院は海へ出ばつた一本立ちの大きな石の上に二間程に石垣を積上げてその上に建つてゐた。その間五六間が可なりの勾配の廊下でつながつてゐる。その他は自然のまゝで、人家もなく、いかにも支那繪を見る心持であつた。

そこを廻つて汽船は陸沿ひに進む。庭に取入れてよいやうな

仙醉島

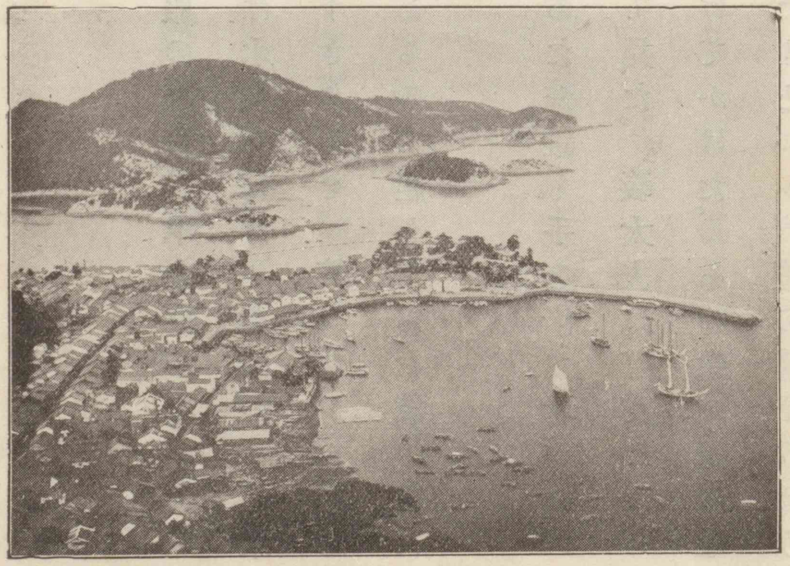
松の生えた手頃な小さい島がいくつかあつて、やがて鞆の津に船は止つた。仙醉島が靜かに横たはつてゐる。繪葉書で勝手に想像してゐた向とは全く反對側にそれがあつたので、多少彼は物足らなかつたが、ともかくそれは氣持のいゝ穩かな島であつた。町の方は人家でごちやごちやしてゐた。保命酒釀造元とか、元祖十六味保命酒とかペンキで塗つた烟突が所々に立つてゐた。

彼はその晩こゝで月見をするつもりだつたが、空模様が

鞆の津
沼隈郡。瀨戸內海の港。

とても見られさうもないので、そのまゝ乘越すことにした。

段々身體が冷えて不愉快になつて來た。彼は船室へ降りて行つた。二等といふので客は五六人しかゐなかつた。その中に混つて彼も横になつた。船は少しづつ搖れて、ばたんばたんと胴を打つ波の音が聞えた。彼は



少し睡かつたが眠れば風邪をひきさうなので、又起きて、持つて來た本を讀始めた。

「御退屈でございます。」洋服の腕に二本金筋を卷いた船員が、自分はレコード、蓄音機は水夫に持たせてはいつて來た。「どうぞ御自由におかけ下さりませ。」笑ひながらこんなことをいつて、大概は寝てゐるので、起きてゐた彼の前にそれを置いた。

彼はそのまゝ本を讀んでゐたが、誰も手を出す者がないので、レコードの函を引寄せて見た。義太夫は好だつたので、彼はそれ等を三四枚つづけてかけた。その次に滑稽な唄をかけた。だんだん、だんだんだんだんといふ汽罐の響、ぼうぼう

と甲板で鳴らす汽笛、船の胴を打つ波音、それ等と入混つて、不調和に蓄音機は浮かれてゐる。彼は蓄音機をやめて、又甲板へあがつて行つた。

いつかもう讃岐の海岸が遠く見えてゐた。そこには三四人の客が立つてゐた。

「事務長さん、金毘羅さんのお山はどれですかいな。」

「あれでございます。」さつき蓄音機を持つて來た金筋を卷いた男が指して答へた。「あれがその象の頭に似てゐるといふので、それで象頭山金毘羅大權現と申すのださうでございます。」

帆を張つた漁船が四五艘、黒ずんだ藍色の海を力強く走

善通寺
香川縣善通寺町にある眞言宗の寺。空海の生地、誕生院ともいふ。

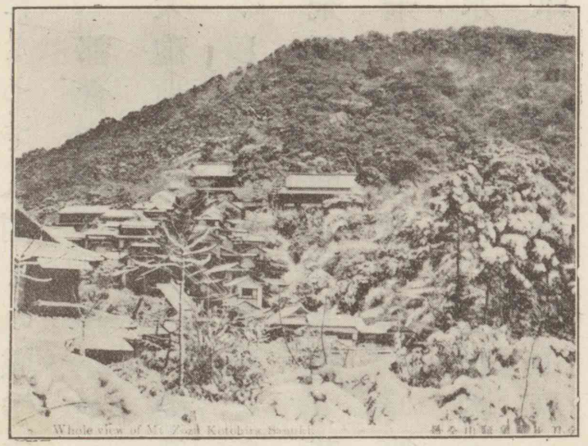
つてゐた。事務長はこの邊が内海の眞中で西からも東からも汐が上げて來て、こゝで又別れて兩方へ干て行くのだと説明した。

「來月は善通寺さんの御開扉で、又一段と賑はふでござんせう。」こんな事もいつた。

彼は一人船尾へ行つて、そこのベンチに腰かけた。彼は象頭山、それからそれに連なる山々を眺めた。彼は今事務長がいつた山よりもその前の山がもつと象の頭に似てゐると思つた。そして彼は、それだけの頭を出して大地へ埋まつてゐる大きな象が、全身で立上つた場合を空想したりした。それから起る人間の騒ぎ、人間がその爲に滅し盡く

象頭山

されるか、人間がそれを斃すかといふ騒ぎ、世界中の軍人・政治家・學者が智慧をしぼる。大砲・地雷、さういふものは、象皮病といふくらゐで、その象では皮膚の厚みが一町ぐらゐある爲に用をなさない。食糧攻にするには、朝飯と晝飯の間が五十年なので、どうすることも出來ない。賢い人間は、怒らせなければ悪い事はしないだらうといふ。印度の或宗旨の人々は神だといふ。しかし全體の人間は、どうかして殺さうと様々な詭計を弄す



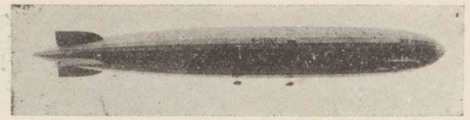
ツェッペリン　Zeppelin　歐洲戰爭中に用ひられし飛行船。

多度津　香川縣仲多度郡の町。船にて金刀比羅神社に參詣する者多く此處にて乘降す。

る。とう〱象は怒り出す。……彼はいつか自分がその象になつて人間との戰爭で一人興奮した。

都會で一つ足踏をすると、一時に五萬人がつぶされる。大砲・地雷・毒瓦斯・飛行機・飛行船、さういふあらゆる人智を盡くした武器で攻寄せられる。しかし彼が一つ鼻で吹けば、飛行機は蚊よりも脆く落ち、ツェッペリンは風船玉のやうに飛んで行つてしまふ。彼が鼻へ吸ひこんだ水を吐けば洪水になり、海に一度はいつて駈上つて來ると、それが大きな津波になる。……

「御退屈でございました。もうあれが多度津でございます。十分で着きますで、御支度を……」かう事務長が知らせ



ツェッペリン

暗夜行路　二四一頁—二五五頁。大正十一年七月、新潮社發行。

に來た。彼は退屈どころではなかつたのである。

ぼうぼうと耳の底へいやに響く汽笛を頻りに鳴らしながら船は屋根の澤山見える多度津へ向つて進んでゐた。

彼はたわいない想像から覺めた。別に支度もなかつたので、洋傘を取りに一度船室へ降りて、又出て來た。夕日が沖の島といふ島の上に赤く耀き出した。甲板には十四五人の客が立つてゐた。

多度津の波止場には波が打ちつけてゐた。波止場の中には達磨船・千石船といふやうな荷物船が澤山はいつて居た。

（暗夜行路）

芥川龍之介　東京の人。東京帝國大學文科出身。小說家。昭和二年七月歿、年三十六。

二三　蜘蛛の絲

芥川龍之介

一

或日のことでございます。お釋迦樣は極樂の蓮池のふちを、一人でぶらぶらお歩きになつていらつしやいました。池の中に咲いてゐる蓮の花はみんな玉のやうに眞白で、その眞中にある金色の蘂からは、何とも言へない好い香が、絶間なくあたりへ溢れて居ります。極樂は丁度朝なのでございませう。

やがてお釋迦樣はその池の緣にお佇みになつて、水の面を蔽つてゐる蓮の葉の間から、ふと下の樣子を御覽になり

芥川龍之介

ました。この極樂の蓮池の下は、丁度地獄の底に當つてをりますから、水晶のやうな水を透徹して、三途の河や針の山の景色が、丁度覗き眼鏡を見るやうにはつきりと見えるのでございます。

するとその地獄の底に、犍陀多（かんだた）といふ男が一人、外の罪人と一緒に蠢いてゐる姿が、お眼に留りました。この犍陀多といふ男は、人を殺したり、家に火をつけたり、いろいろ悪事を働いた大泥棒でございますが、それでもたつた一つ、善い事をした覺がございます。と申しますのは、或時この男が深い林の中を

通りますと、小さな蜘蛛が一匹、路ばたを這つて行くのが見えました。そこで犍陀多は早速足を擧げて、踏殺さうとしましたが「いや〳〵、これも小さいながら命のあるものに違ひない。その命を無闇にとるといふ事は、いくら何でもかはいさうだ。」と、かう急に思ひ返してとう〳〵その蜘蛛を殺さずに助けてやつたからでございます。

お釋迦樣は地獄の樣子を御覽になりながら、この犍陀多には蜘蛛を助けた事があるのをお思ひ出しになりました。さうして、それだけの善い事をした報には、出來るなら、この男を地獄から救ひ出してやらうとお考へになりました。幸ひ側を御覽になりますと、翡翠のやうな色をした蓮の葉

（二三）蜘蛛の糸

極樂の菩薩　融通念佛緣起繪卷

の上に極樂の蜘蛛が一匹、美しい銀色の絲をかけて居ります。お釋迦樣はその蜘蛛の絲をそつとお手にお取りになつて、玉のやうな白蓮の間から、遙か下にある地獄の底へ眞直にお下しなさいました。

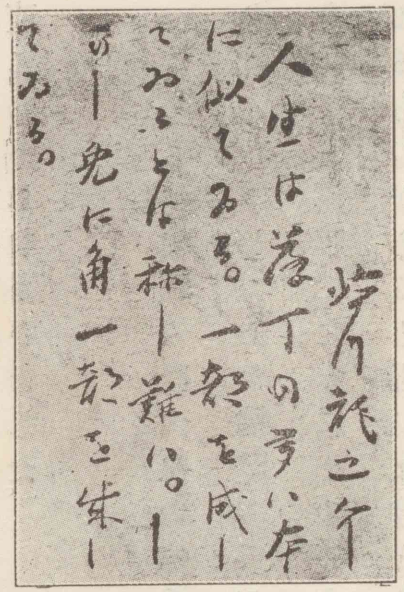
二

こちらは地獄の底の血の池で、外の罪人と一緒に浮いたり沈んだりしてゐた犍陀多でございます。何しろどちらを見ても眞暗で、たまにそのくら闇からぼんやり浮上つてゐるものがあると思ひますと、それは恐しい針の山の針が光るのでございますから、その心細さといつたらございません。その上、あたりは墓の中のやうにしんと靜まり返つ

て、たまに聞えるものといつては、ただ罪人が吐く微かな溜息ばかりでございます。

芥川龍之介筆蹟

人生は落丁の多い本に似てゐる。一部を成してゐるとは稱し難い。しかし兎に角一部を成してゐる。



これは此處へ落ちて來る程の人間は、もうさまざまな地獄の責苦に疲れ果てて、泣聲を出す力さへなくなつてゐるのでございませう。　ですからさすが大泥棒の犍陀多も、やはり血の池の血に咽びながら、まるで死にかゝつた蛙のやうに、ただもがいてばかり居りました。

ところが或時の事でございます。　何氣なく犍陀多が頭を擧げて、血の池の空を眺めますと、そのひつそりとした闇の中を、遠い〳〵天上から、銀色の蜘蛛の絲が、まるで人目にかゝるのを恐れるやうに、一筋細く光りながらする〳〵と自分の上へ垂れて參るではございませんか。　犍陀多はこれを見ると、思はず手を打つて喜びました。　この絲に縋りついて何處までも上つて行けば、きつと地獄からぬけ出せるに相違ございません。　いや、うまく行くと極樂へはいる事さへも出來ませう。　さうすれば、針の山へ追上げられることもなくなれば、血の池に沈められることもあるはずはございません。

かう思ひましたから犍陀多は、早速その蜘蛛の絲を兩手

でしつかりと摑みながら、一生懸命に上へ〳〵と、たぐりのぼり始めました。　もとより大泥棒のことでございますから、かういふ事には昔から慣切つて居るのでございます。併し地獄と極樂との間は、何萬里となくございますから、いくら焦燥つて見た所で容易に上へは出られません。ややしばらくのぼる中に、とう〳〵犍陀多もくたびれて、もう一手繰りも上の方へはのぼれなくなつてしまひました。そこで仕方がございませんから、先づ一休み休む積りで絲の中途にぶら下りながら、遙かに目の下を見おろしました。すると、一生懸命にのぼつたかひがあつて、さつきまで自分が居た血の池は、今ではもう闇の底に何時の間にか隱れ

て居ります。　それから、あのぼんやり光つてゐた恐しい針の山も、足の下になつてしまひました。　この分でのぼつて行けば、地獄からぬけ出すのも存外譯がないかも知れません。　犍陀多は兩手を蜘蛛の絲にからみながら、此處へ來てから、何年にも出した事のない聲で、

「しめた、しめた。」

と笑ひました。

ところが、ふと氣がつきますと、蜘蛛の絲の下の方には、數限りもない罪人たちが自分ののぼつた後をつけて、まるで蟻の行列のやうに、やはり上へ〳〵と一心に攀ぢのぼつて來るではございませんか。　犍陀多は之を見ると、驚いたの

と恐しいのとで、暫くは唯馬鹿のやうに大きな口を開いた儘、眼ばかり動かして居りました。

自分一人でさへ斷れさうなこの細い蜘蛛の絲が、どうしてあれだけの人數の重みに堪へる事が出來ませう。もし萬一、途中で斷れたといたしましたら、折角此處へまでのぼつて來たこの肝腎な自分までも、もとの地獄へ逆落しに落ちてしまはなければなりません。そんな事があつたら大變でございます。が、さういふ中にも、罪人たちは何百となく何千となく、眞暗な血の池の底から、うよ〳〵と這上つて、細く光つてゐる蜘蛛の絲を、一列になりながら、せつせとのぼつて參ります。今の中にどうかしなければ、絲は眞中か

ら二つに斷れて、落ちてしまふのに違ひありません。

そこで犍陀多は大きな聲を出して、

「こら、罪人ども、この蜘蛛の絲はおれの物だぞ。お前たちは一體誰の許を得てのぼつて來た。下りろ。下りろ。」と喚きました。

その途端でございます。今まで何ともなかつた蜘蛛の絲が、急に犍陀多のぶらさがつてゐる處から、ぷつりと音を立てて斷れました。ですから、犍陀多もたまりません。あつといふ間もなく、風を切つて、獨樂のやうにくる〳〵まはりながら、見る〳〵中に闇の底へ、まつさかさまに落ちてしまひました。

後には唯極樂の蜘蛛の絲が、きら〳〵と細く光りながら、月も星もない空の中途に、短く垂れて居るばかりでございます。

三

お釋迦樣は蓮池のふちに立つて、この一部始終をじつと見ていらつしやいましたが、やがて犍陀多が血の池の底へ石のやうに沈んでしまひますと、悲しさうなお顔をなさりながら、又ぶらぶらとお歩きになり始めました。自分ばかり地獄から拔出さうとする、犍陀多の無慈悲な心が、さうしてその心相當な罰を受けて、もとの地獄へ落ちてしまつたのが、お釋迦樣のお目から見ると、あさましくおぼし召され

たのでございませう。

併し極樂の蓮池の蓮は、少しもそんな事には頓着いたしません。その玉のやうな白い花は、お釋迦樣のおみ足のまはりに、ゆら〳〵と蕚を動かして、その眞中にある金色の蘂からは、何とも言へない好い香が絶間なくあたりへ溢れて居ります。極樂ももう晝に近くなつたのでございませう。

（芥川龍之介全集）

芥川龍之介全集第一卷五五九頁—五六六頁。昭和二年十二月、岩波書店發行。

女子國文大綱　卷二　終

常用漢字及略字（臨時國語調査會決定）

（一）常用漢字（千九百六十二字）

【一】一丁七丈三上下不
世丙並【丨】中【丶】丸主
【丿】久乏乘【乙】乙九乞
也乳亂【亅】了事【二】二
云互五井【亠】亡交京亭
【人】人仁仇今介仕他付
仙代令以仰仲件任企伊
伏伐休伯伴伺似但位低
住佐何余佛作使來例侍
供依侮侯侵便係促俊俗
保俠信修俳俵俸併倉個
倍倒候借倫假偉偏停健
側偶傍傑備催働傳債傷
傾僅像僚僞僧價儀億儉
儒償優【儿】元兄充兆兇
先光克免兒兔【入】入內
全兩【八】八公六共兵具

典兼【冂】冊再【冖】冠
【冫】冬冷凉准凌凍凝
【几】凡【凵】凶凸凹出
【刀】刀刃分切刈刊刑列
初判別利到制刷券刺刻
則削前剛副割創劇劍劑
【力】力功加劣助努効勅
勇勉動勘務勝勞募勢勤
勳勵勸【勹】勺勿包【匕】
化北【匚】匹區【十】十千
升午半卑卒卓協南博
【卜】占【卩】印危却卵卷
卽卿【厂】厄厘厚原【厶】
去參【又】及友反叔取受
叛【口】口古句叫召可叱
史右司各合吉同名后吏
吐向君吞吟否含呈吸吹

告周味呼命和咽哀品員
哲唐唱商問啓善喉喜喪
單嗣嘉嘗器噴嚴囑【囗】
囚四回因困固國圍園圓
圖團【土】土在地坂均
坊坐坑坪垂型垣埋城域
執培基堀堂堅堤堪報場
塔塗塚塵境墓塀增墨墮
壁壇壓壤【士】士壯壹壽
【夂】夏【夕】夕外多夜夢
【大】大天太夫央失奇奉
奏契奔奢奧奪獎奮【女】
女奴好如妃妊妙妨妹妻
妾姉始姑姓委姦姪姬姻
姿威娘娛娠婚婦婿媒嫁
嫉嫡嫌孃【子】子字存孝
季孤孫學【宀】宅宇守安

完宗官定宛宜客宣室宮
宰害宴家容宿寄密富寒
察寡寢實審寫寬寶【寸】
寸寺封射將專尉尊尋對
導【小】小少尙【尢】就
【尸】尺尼尾尿局居屆屈
屋展層履屬【山】山岡岩
岬岳岸峠峯島峽崇崎崩
嶮【巛】川州巡巢【工】工
左巧巨差【己】己【巾】市
布帆希帖帝帥師席帳帶
常帽幅幕幣【干】干平年
幸幹【幺】幻幼幾【广】床
序底店府度座庫庭庶康
廉廊廟廢廣廳【廴】延廷
建廻【廾】弄弊【弋】式
【弓】弓弔引弘弟弱張强

彈【彡】形彩彫影【彳】役
彼往征待律後徐徑徒得
從御復循微徵德徹【心】
心必忌忍志忘忙忠快念
忽怒思怠急性怨怪怯恐
恥恨恩恭息悅悔悟患悲
悼情惑惜惠惡惰惱想愁
愉意愚愛感慈態慕慘慢
慣慨慮慰慶慾憂憐憚憲
憶憾憤懇應懲懷懸戀
【戈】成我戒戚戰戲戴
【戶】戶戾房所【手】手才
打托扱扶批承技抑投抗
折抱抵押抽拂拍拒拓拔
拘拙招拜括拳拾持指振
捌捕捧捨掃授掌排掘掛
採探控推揚接提換握揭
揮援損搖搜摘携摩撫擇
擊操擔據擬擴攝【支】支
【攴】收改攻放政故效敍

敎敏救敗敢散敬敵敷數
整【文】文【斗】斗料斜
【斤】斤斥斬新斷【方】方
施旋旅族旗【无】既【日】
日旦旨早旬旭昇昌明易
昔星春昨是時晚晝普景
晴晶智暇暖暗暑暮暴曆
曇曜【曰】曲更書曹會替
最會【月】月有朋服朕朗
望朝期【木】木未末本札
朱机朽杉李材村杖束柿
杯東松板枕林枚果枝枯
架柄某染柔查柩柱柳栗
校株根格栽桃案桐桑桶
梅條梨梯械棄棋棒棚棟
森棺植楠業極榮構概樂
樋樓標樞模樣樹橋機橫
檄檜檢櫻欄權【欠】次欲
款欺歌歎歐歟【止】止正
此步武歲歷歸【歹】死殁

殊殉殖殘【殳】段殺殼殿
毀【毋】毋每毒【比】比
【毛】毛毫【氏】氏民【气】
氣【水】水氷永汁求汗汚
江池決汽沈沒沖沙河沸
油治沼沿況泉泊法波泣
泥注泰泳洋洗津洪洲活
派流浦浪浮浴海浸消涉
液淑淚淡淨淫深混淸淺
添減渡溫測港渴游湖湧
湯源準溝溢溶溺滅滋滑
滯滴滿漁漂漆漏演漕漠
漢漫漸潔潛潮澤激濁濃
濕濟濫濱瀧灌灣【火】火
灰災炊炎炭烈烏無焰然
煉煎煮煙煤照煩熊熟熱
燃燈燒營燭爆爐【爪】爪
爭爲爵【父】父【片】片版
牌牒【牙】牙【牛】牛牧物
牲特犧【犬】犬犯狀狂狐

狩狹狼猛猫猶猿獄獨獲
獵獸獻【玄】玄率【玉】玉
王玩珍珠班現球理琴
【瓜】瓜【瓦】瓦瓶【甘】甘
甚【生】生產甥【用】用
【田】田由甲申男町界畏
畑畔畜畝略番畫異留當
疊【疋】疋疎疏疑【疒】疫
疲疾病症痕痘痛痢療
【癶】登發【白】白百的皆
皇【皮】皮【皿】皿盆益盛
盜盟盡監盤【目】目盲直
相省眉看眞眠眺眼着睡
督睦瞭【矢】矢知短【石】
石砂砲破研硬硯碁碎碑
確磁磨礎【示】示社祈祕
祖祝神票祭禁禍福禦禮
【禾】秀私秋科秒租秤秩
移稅程稚種稱稻稼稿穀
積穗穩【穴】穴究空穿突

窃窒窗窮【立】立章童端
競【竹】竹竿笑笛笠符第
筆等筋筒答策箇算管篇
箱節範築篤簡簿籍【米】
米粉粒粘粗粟粹精糖糞
【糸】系紀約紅紋納純紗
紙級紛素紡索紫累細紳
紹紺終組結絕絞絡給統
絲絹經綠維綱網綴綻綿
緊緒線締緣編緩緯練縛
縣縫縮縱總績繁織繕繪
繭繰纖纂續【缶】缺【网】
罪置署罰罵罷羅【羊】羊
美羣義【羽】羽翁翌習翼
【老】老考者【而】耐【耒】
耕【耳】耳耽聖聘聞聯聲
職聽【肉】肉肋肖肝股肥
肩肯育肴肺胃背胎胞胴
胸能脂脇脈脊脚脫腎腐
腕腦腰腸腹腺膏膚膜膝

膳膽臆臟【臣】臣臥臨
【自】自臭【至】至致臺
【臼】臼與舅興擧舊【舌】
舌舍【舛】舞【舟】舟航般
舵舶船艇艘艦【艮】良
【色】色【艸】芋芝花芽芳
苑苗若苦英茂茶草荒荷
莊莖菊菌菓菜華萩萬落
葉著葬蒔蒙蒸蓄蓮蔓蔭
薄薦薪藍藏藝藤藥蘇
【虍】虎虐處虛虜號【虫】
蚊蛇蛙蜂蜜融蟲蠶蠻
【血】血衆【行】行術街衝
衡衞【衣】衣表衰袂袋袖
被袴裁裂裏裕補裝裸製
複褒【西】西要覆【見】見
規視親覺覽觀【角】角解
觸【言】言訂計討訓託記
訟訪設許訴診詐詔評詞
詠詣試詩詰話詳誅誇誌

認誓誕誘語誠誤誦說課
誼調談請諒論諫諭諸諾
謀謁謂謙講謝謠謹證識
譜警譯議護譽讀變讓
【谷】谷【豆】豆豐【豕】豚
象豪豫【貝】貝貞負財貢
貧貨販貫責貯貳貴買貸
費貿賀賃賄資賊賑賓賜
賞賢賣賤賦質賴購贈贊
【赤】赤赦【走】走赴起超
越趣【足】足距跡路踊踏
蹟蹴躍【身】身【車】車軌
軍軒軟軸較載輔輕輝輩
輪輸輿轉【辛】辛辨辭辯
【辰】辰農【辵】込辻迎近
返迫迭述迷追退送逃逆
透逐途通速造逢連週進
逸遂遇遊運過道達遙
遞遠遣適遭遲遷選遺避
還邊【邑】那邦邪邸郊郎

郡部郵都鄉【酉】酌配酒
酢酬酷酸醉醜醫【釆】釋
【里】里重野量【金】金釜
釘針釣鈍鈴鉛鉢銀銃銅
銘銳鋒鋼錄錢錦鍋鍛鎌
鎖鎭鏡鑄鐘鐵鑑鑛【長】
長【門】門閉開閏閑間閣
閱闢【阜】防附降限陛院
陣除陪陳陰陵陶陷陸陽
隅隆隊階隔隙際障隣隨
險隱【隹】隻雀雄雅集雇
雌雙雜離難【雨】雨雪雲
零雷電需震霜霞霧露靈
【靑】靑靜【非】非【面】面
【革】革靴鞍【音】音響
【頁】頂頃項順須頓預頑
頒領頭頻題額顏願顚類
顧顯【風】風【飛】飛飜
【食】食飢飮飯飾養餓餘
餅館饉【首】首【香】香

【馬】馬馳駁駄駐騎騰騒
驅驕驗驚驛【骨】骨髄體
【高】高【髟】髮【鬥】鬪

【鬼】鬼魂魔【魚】魚鮮鯉
鯛鰹【鳥】鳥鳩鳴鶴鶏
【鹵】鹽【鹿】鹿麗【麥】麥

【麻】麻【黄】黄【黒】黒默
點黨【鼓】鼓【鼠】鼠【鼻】
鼻【齊】齊齋【齒】齒齡

【龍】龍【龜】龜

注意

(一)本表にない漢字は假名で書くこと　(二)固有名詞には本表にない文字を用ひても差支ない、たゞし外國(支那を除く)の人名地名は假名書きすること　(三)代名詞、副詞、接續詞、感動詞、助動詞および助詞はなるべく假名で書くこと　(四)外來語は假名で書くこと

(二) 常用略字 (百五十四字、下の小字は字典體)

勧勸 権權 潅灌 歓歡 観觀
沢澤 択擇 訳譯 駅驛 釈釋
変變 恋戀 蛮蠻 湾灣 茎莖
径徑 経經 軽輕 併倂 塀塀
瓶甁 餅餠 研硏 斉齊 斎齋
済濟 剤劑 残殘 浅淺 賎賤
銭錢 労勞 営營 栄榮 学學
覚覺 挙擧 誉譽 断斷 継繼
歯齒 齢齡 湿濕 顕顯 窓窗
総總 属屬 嘱囑 為爲 偽僞

帯帶 滞滯 参參 惨慘 両兩
満滿 発發 廃廢 鼡鼠 猟獵
乱亂 辞辭 潜潛 賛贊 赱走
徒徒 従從 縦縱 悩惱 脳腦
処處 拠據 担擔 胆膽 来來
麦麥 寿壽 鋳鑄 数數 楼樓
楽樂 薬藥 読讀 続續 竜龍
滝瀧 随隨 髄髓 庇鹿 丽麗
聴聽 廰廳 虚虛 戯戲 遅遲
觧解 独獨 触觸 畳疊 摂攝

虫蟲 蚕蠶 仮假 児兒 刻刻
励勵 甞嘗 国國 囲圍 円圓
図圖 壱壹 実實 写寫 宝寶
扣控 叙敍 条條 様樣 帰歸
気氣 炉爐 犠犧 献獻 画畫
畄畱 尽盡 礼禮 称稱 糸絲
欠缺 声聲 台臺 旧舊 万萬
号號 証證 豊豐 弁辯辨 逓遞
辺邊 医醫 鉄鐵 関關 双雙
霊靈 余餘 舘館 体體 闘鬪

塩鹽 点點 党黨 亀龜

文語口語活用表

平林治德編

女子國文大綱附錄

文語動詞活用表

種類	語幹	未然	連用	終止	連體	已然	命令	備考
四段	咲	か	き	く	く	け	け	か・が・さ・た・は・ば・ま・らノ八行アリ
	降	ら	り	る	る	れ	れ	
ら變	有	ら	り	り	る	れ	れ	有り・居り・侍りノ三語居りハ四段トスルヲ得
な變	死	な	に	ぬ	ぬる	ぬれ	ね	死ぬ・往ぬノ二語死ぬハ四段トスルヲ得
か變	(來)	こ	き	く	くる	くれ	こ(よ)	一語ノミ
さ變	(爲)	せ	し	す	する	すれ	せ(よ)	一語ノミ
上二	起	き	き	く	くる	くれ	き(よ)	き・ぎ・ち・ぢ・ひ・び・み・い・りノ九行アリ
	用	ひ	ひ	ふ	ふる	ふれ	ひ(よ)	
	恨・試	み	み	む	むる	むれ	み(よ)	恨むハ四段トスルヲ得
上一	(射)	い	い	いる	いる	いれ	い(よ)	射る・鑄る・着る・似る・煮る・干る・見る・惟みる・顧みる・鑑みる・試みる・居る・率る・率ゐる・用ゐる
下二	(得)	え	え	う	うる	うれ	え(よ)	次清音ノ行以外清濁トモ各行皆アリ
下一	(蹴)	け	け	ける	ける	けれ	け(よ)	一語ノミ

文語形容詞活用表

種類	語幹	未然	連用	終止	連體	已然	命令	備考
く活	高	く	く	し	き	けれ		
しく活	美	しく	しく	し	しき	しけれ		惡し・勇ましナドノ終止形ハ惡しし・勇まししトスルヲ得

文語助動詞活用表

種類	未然	連用	終止	連體	已然	命令	接續
受身可能尊敬	れ	れ	る	るる	るれ	れ(よ)	四段・な變・ら變ノ未然ニ
受身可能尊敬	られ	られ	らる	らるる	らるれ	られ(よ)	右以外ノ未然ニ
使役尊敬	せ	せ	す	する	すれ	せ(よ)	四段・な變・ら變ノ未然ニ
使役尊敬	させ	させ	さす	さする	さすれ	させ(よ)	右以外ノ未然ニ
使役尊敬	しめ	しめ	しむ	しむる	しむれ	しめ(よ)	未然ニ
可能推量	べく	べく	べし	べき	べけれ		終止ニ、ら變ニハ連體ニ

口語動詞活用表

種類	語幹	未然	連用	終止	連體	已然	命令	備考
四段	咲	か	き	く	く	け	け	
	降・有	ら	り	る	る	れ	れ	
	死	な	に	ぬ	ぬ	ね	ね	
か變	(來)	こ	き	くる	くる	くれ	こ(い)	
さ變	(爲)	せ・し	し	する	する	すれ	せ(よ)・し(ろ)	
上一	起	き	き	きる	きる	きれ	き(ろよ)	
	用	ひ	ひ	ひる	ひる	ひれ	ひ(ろよ)	
	恨・試	み	み	みる	みる	みれ	み(ろよ)	恨むハ四段ニモ用フ
	(射)	い	い	いる	いる	いれ	い(ろよ)	
下一	(得)	え	え	える	える	えれ	え(ろよ)	
	(蹴)	け	け	ける	ける	けれ	け(ろよ)	

口語形容詞活用表

種類	語幹	未然	連用	終止	連體	已然	命令	備考
く活	高	く	く・う	い	い	けれ		けれ・しけれハ口語ニテハ未然・已然ノ差ナク條件ヲ示スノミ
しく活	美	しく	しく・しう	しい	しい	しけれ		

口語助動詞活用表

種類	未然	連用	終止	連體	已然	命令	接續
受身可能尊敬	れ	れ	れる	れる	れれ	れ(ろよ)	四段ノ未然ニ
受身可能尊敬	られ	られ	られる	られる	られれ	られ(ろよ)	四段以外ノ未然ニ
使役尊敬	せ	せ	せる	せる	せれ	せ(ろよ)	四段ノ未然ニ
使役尊敬	させ	させ	させる	させる	させれ	させ(ろよ)	四段以外ノ未然ニ
使役尊敬	しめ	しめ	しめる	しめる	しめれ	しめ(ろよ)	未然ニ
尊敬	ませ	まし	ます	ます	ますれ	ませ	連用ニ

種類	未然	連用	終止	連體	已然	命令	接續
四段 咲	か	き	く	く	け	け	か・が・さ・た・は・ば・ま・らノ八行アリ
四段 降	ら	り	る	る	れ	れ	
ら變 有	ら	り	り	る	れ	れ	有り・居り・侍りノ三語居りハ四段トスルヲ得
な變 死	な	に	ぬ	ぬる	ぬれ	ね	死ぬ・往ぬノ二語死ぬハ四段トスルヲ得
か變 (來)	こ	き	く	くる	くれ	こ(よ)	一語ノミ
さ變 (爲)	せ	し	す	する	すれ	せ(よ)	一語ノミ
上二 起	き	き	く	くる	くれ	き(よ)	き・ぎ・ち・ぢ・ひ・び・み・い・りノ九行アリ
上二 用	ひ	ひ	ふ	ふる	ふれ	ひ(よ)	
上二 恨・試	み	み	む	むる	むれ	み(よ)	恨むハ四段トスルヲ得
上一 (射)	い	い	いる	いる	いれ	い(よ)	射る・鑄る・着る・似る・煮る・干る・見る・惟みる・顧みる・鑑みる・試みる・居る・率る・率ゐる・用ゐる
下二 (得)	え	え	う	うる	うれ	え(よ)	次清音ノ行以外清濁トモ各行皆アリ
下一 (蹴)	け	け	ける	ける	けれ	け(よ)	一語ノミ

文語形容詞活用表

種類	未然	連用	終止	連體	已然	命令	接續
く活 高	く	く	し	き	けれ		
しく活 美	しく	しく	し	しき	しけれ		惡し・勇ましナドノ終止形ハ惡しし勇まししトスルヲ得

文語助動詞活用表

種類	未然	連用	終止	連體	已然	命令	接續
受身可能尊敬	れ	れ	る	るる	るれ	れ(よ)	四段・な變・ら變ノ未然ニ
受身可能尊敬	られ	られ	らる	らるる	らるれ	られ(よ)	右以外ノ未然ニ
使役尊敬	せ	せ	す	する	すれ	せ(よ)	四段・な變・ら變ノ未然ニ
使役尊敬	させ	させ	さす	さする	さすれ	させ(よ)	右以外ノ未然ニ
使役尊敬	しめ	しめ	しむ	しむる	しむれ	しめ(よ)	未然ニ
可能推量	べく	べく	べし	べき	べけれ		終止ニ、ら變ニハ連體ニ
可能推量	べから	べかり	べかり△				終止ニ、ら變ニハ連體ニ
過去			き	し	しか		連用ニ、＊か變さ變ニハ特殊ノ接續チナス
過去詠歎	(けら)	(けり)	けり	ける	けれ		連用ニ
完了	て	て	つ	つる	つれ	て(よ)	連用ニ
完了	な	に	ぬ	ぬる	ぬれ	ね	連用ニ、死ぬニハ連ネズ
完了	(ら)	(り)	り	る	(れ)		さ變ノ未然四段ノ已然ニ
完了指定	たら	たり	たり	たる	たれ	たれ	完了ハ連用、指定ハ體言ニ
未來推量			む ん	む ん	め		未然ニ
推量			らむ らん	らむ らん	らめ		終止ニ、ら變ニハ連體ニ
推量			けむ けん	けむ けん	けめ		連用ニ
推量			めり	める	めれ		終止ニ、ら變ニハ連體ニ
推量			まし	まし	ましか		未然ニ
推量			(らし)	(らし)	(らし)		終止ニ、ら變ニハ連體ニ
推量	らしく	らしく	らし	らしき	らしけれ		終止ニ、ら變ニハ連體ニ
推量	まじく	まじく	まじ	まじき	まじけれ		終止ニ、ら變ニハ連體ニ
打消			じ	じ	じ		未然ニ
打消	ず	ず	ず	ぬ	ね		未然ニ
打消	ざら	ざり	ざり△	ざる	ざれ	ざれ	未然ニ
指定詠歎	なら	なり	なり	なる	なれ	なれ	指定ハ體言又ハ連體ニ、詠歎ハ終止ニ
希望	まほしく	まほしく	まほし	まほしき	まほしけれ		未然ニ
希望	たく	たく	たし	たき	たけれ		連用ニ
比況	ごとく	ごとく	ごとし	ごとき			連體・が・のニ

備考 △印ハ實際ニ用ヒヌモノ、括弧内ノモノハ古文體ニ用フルモノ
＊か變ニハこし・こしか・きし・きしか・さ變ニハせし・せしか・しきト連ナル

種類	未然	連用	終止	連體	已然	命令	接續
四段 咲	か	き	く	く	け	け	
四段 降・有	ら	り	る	る	れ	れ	
四段 死	な	に	ぬ	ぬ	ね	ね	
か變 (來)	こ	き	くる	くる	くれ	こ(い)	
さ變 (爲)	し せ	し	する	する	すれ	し(ろ) せ(よ)	
上一 起	き	き	きる	きる	きれ	き(ろよ)	
上一 用	ひ	ひ	ひる	ひる	ひれ	ひ(ろよ)	
上一 恨・試	み	み	みる	みる	みれ	み(ろよ)	恨むハ四段ニモ用フ
上一 (射)	い	い	いる	いる	いれ	い(ろよ)	
下一 (得)	え	え	える	える	えれ	え(ろよ)	
下一 (蹴)	け	け	ける	ける	けれ	け(ろよ)	

口語形容詞活用表

種類	未然	連用	終止	連體	已然	命令	接續
く活 高	く	く う	い	い	けれ		けれ・しけれハ口語ニテハ未然・已然ノ差ナク條件チ示スノミ
しく活 美	しく	しく しう	しい	しい	しけれ		

口語助動詞活用表

種類	未然	連用	終止	連體	已然	命令	接續
受身可能尊敬	れ	れ	れる	れる	れれ	れ(ろよ)	四段ノ未然ニ
受身可能尊敬	られ	られ	られる	られる	られれ	られ(ろよ)	四段以外ノ未然ニ
使役尊敬	せ	せ	せる	せる	せれ	せ(ろよ)	四段ノ未然ニ
使役尊敬	させ	させ	させる	させる	させれ	させ(ろよ)	四段以外ノ未然ニ
使役尊敬	しめ	しめ	しめる	しめる	しめれ	しめ(ろよ)	未然ニ
尊敬	ませ	まし	ます	ます	ますれ	ませ	連用ニ
完了過去	たら	たり	た	た	たれ		連用ニ
未來推量			う				四段ノ未然ニ
未來推量			よう				四段以外ノ未然ニ
推量	さうなら	さうに		さうな	さうなれ		連用・連體ニ
推量	さうだら	さうだっ	さうだ				連用・連體ニ
推量	さうでせ	さうでし	さうです				連用・連體ニ
推量		さうで					連用・連體ニ
推量	らしく	らしく らしう	らしい	らしい	らしけれ		終止ニ
推量			まい				四段ハ終止、他ハ未然ニ
打消		なく	ない	ない	なけれ		未然ニ
打消		ず	ぬ ん	ぬ ん	ね		未然ニ
指定	でせ	でし	です				體言ニ
指定	なら				なれ		連體・體言ニ
指定	だら	だっ	だ				體言ニ
希望	たく	たく	たい	たい	たけれ		連用ニ
比況推量	やうなら	やうに		やうな	やうなれ		連體・が・のニ
比況推量	やうだら	やうだっ	やうだ				連體・が・のニ
比況推量	やうでせ	やうでし	やうです				連體・が・のニ
比況推量		やうで					連體・が・のニ

昭和五年九月八日
文部省檢定濟
高等女學校國語科用

昭和四年十月五日印刷
昭和四年十月十日發行
昭和五年八月十五日修正印刷
昭和五年八月二十日修正發行

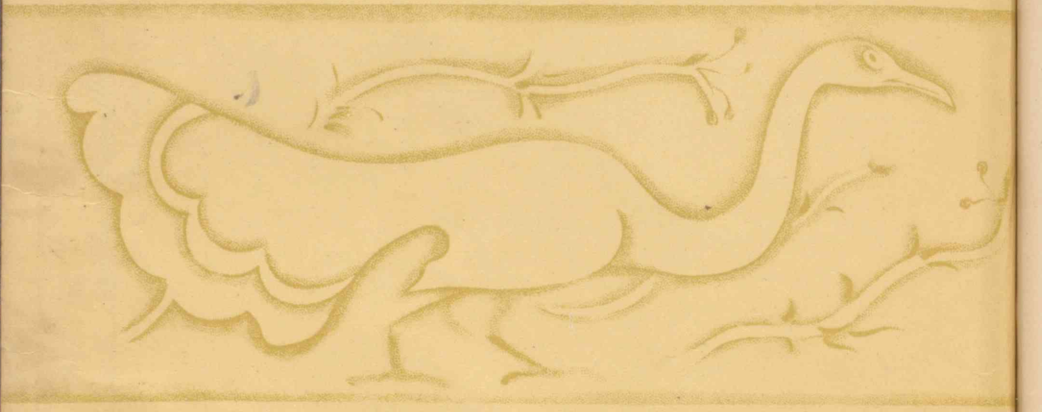
著作

女子國文大綱 卷一——卷十 定價 各金六十九錢

編者 平林治德
大阪市南區安堂寺橋通三丁目四十五番地
發行者 立川熊次郎
大阪市西區阿波座二番町三番地
印刷者 北隅茂

發行所
大阪市南區安堂寺橋通三丁目四十五番地
振替口座(大阪一四六一番)
立川書店

小店發行の教科書は常に多數の製本準備してありますから萬一各地賣捌所に賣切の場合課業に御差支の節は直接御註文下さい直ぐ御送り致します



一A
丸矢文子